
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~灰より生まれし王~

schwarzschild

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers～灰より生まれし王～

【NZコード】

N4467W

【作者名】

schwarzschild

【あらすじ】

少年は大切な仲間を失い、暖かな温もりを奪い去った。そして手に入れたのは望んだ力と得るはずもない記憶。時は過ぎ、新暦75年。ある者は反旗を翻し……ある者は陰謀を企て……ある者は復讐を始める。様々な思いが交錯するなか、幽靈と謳われた青年レオ・メイソンは何を思い、何を考えるのか。schwarzschildがおくる、もう一つのリリカルなのはStrikers。どうぞ、お楽しみ下さい。 *本作品は一次小説にあたります。

予告編（前書き）

初めまして、schwarzschildと申します。

今回、魔法少女リリカルなのはStrikersの一次創作に着手させていただきました。

小生、まだまだ未熟者ですが、どうぞこれからのお付き合いよろしくお願いします。

*この予告編には少々ネタバレの要素が含まれているかもしれませんので、どうか悪しからずご了承下さい。

*schwarzschild*が描く、もうひとりの魔法少女リリカルなのは_{Strikers}

「今日はJNや、貴方を逮捕させてもうござりますよレオンー。」

「JN重にお断つさせていただこうつー。」

燃え盛る空港。

「これが火災の原因となつたロストロギアや」

「これが……！？」

原因となつたのは高エネルギー結晶体・レリック。

「本日より、高町なのは一等空尉」

「フュイト・テスター・ハラオウン執務官」

「両名とも機動六課に出向となります」

「よろしくお願ひします」

救助を行つた少女たちは、四年の年月を費やし新たな部隊を立ち上げる。

「機動六課設立や」

物語はここから始まる。

「マスター、時間です」

「ターゲットリンク完了。オウル、サイレントモード解除」

六課を襲撃する仮面の男レオ・メイソン。

「骨の一本や一本、ここで折つておいたほうが良さうですね」

「言つよひになつたなセレスティア」

彼が追つのは謎の武装集団・レンツクネヒト。

「ディバインバスターアアアアアーナー」

「鳳凰烈火斬」

六課はロストロギアを巡り彼らと対立する。

「あれはガッジエットローンー？」

動き出す、もう一つの勢力。

「素晴らしい！ 素晴らしいぞーー！」

天才科学者ジェイル・スカリエッティ。

「わたしの作品はやはりいい出来だな」

「順調のようだね、ジェイル」

生み出された無限の欲望は

「さあ、祭りの始まりだ！」

さりなる高みをを目指す。

時は新暦75年。

平和を謳うミッドチルダに災いが降りかかる。

「通信管制システムに異常！ クラッキング！！ 侵入されています

！！」

地上本部に襲いかかるのは

「AFM濃度が高い。魔力が結合できなくなっています」

「通信も通らへん…………やられた！」

無数の機械人形。

「電子が織りなす、嘘と幻。銀幕世界をお楽しみあれ」

「HS発動ランブル『トネイター』」

「バレットイメージ・エアゾルシェル」

研磨された戦闘機人。

「良しなに頼むぞ」

「おまかせあれ」

強大な人造魔導師たち。

「裏切ったな、スカリエッティイイイー！」

そして、明かされる

「あなたたちはここで『退場願います』

「き、貴様の主は我々が売つてやつた恩を

「黙りなさい！ 老害！！」

壮大な

「もつと激しく！ もつと強く！ わたしの舞台で踊つてください
！！」

陰謀の数々。

「ついの日覚めたか…………呑まわしき箱舟、聖王のゆりかご」

そして、青年の選んだ未来とは

魔法少女リリカルなのはStrikers～灰より生まれし王～

毎週日曜更新予定

予告編（後書き）

いかがでしたか？
今回は予告編でした。

次回からは本編に入つてこきます。
更新は明日予定です。
それでは、また明日お会いしましょ！

Prologue (前書き)

皆さんこんばんわ。

今日は予定通りの更新を行います。

それでは、どうぞ。

地には骸の山。

灰が落ちた空は混沌としていた。

「こつまでだ……」

低く唸るよひに男は呟く。

彼は一対の剣を携えた騎士。

その鎧にはすでに輝きはない。

男は全身を血で染め上げ、鎧は赤く、いや黒く変色しているのだ。

男が剣を振るつ度、己の身に血が吹き付けられていくその血じよ
つて。

「こつまでだ……」

男は眼下に集う者を見て再び呟く。

男を囲むのは田にも上の騎士たち。

騎士たちは王国の旗を掲げている。

「これまでにんなことを続けなくてはならない」

男の瞳に映るは大切な者を失つた悲しみ。

男の心を埋めるは激しい憎しみ。

そして、体が為すは「」を焦がせんじばかりに燃える憤怒。

「我々が…………」

血の拭うじとやえない異様な男。

彼に向かつて百の騎士が殺到する。

一閃。

向かつてくる騎士たちに向け男は剣を薙いだ。

生まれた斬撃が騎士たちに悲鳴を上げる」とやえ訐わず飲みこんでいく。

「我々が望んでいたのは「んなものではないだらけ」。

悲嘆の声を上げる男。

されど、それに答える者はいない。

「……………そづか」

男は剣を納め、自らが手にかけた騎士たちに一礼をすると、その場を去つた。

「この戦場でも死ぬ」とはなかつた。

だから、進み続けることを止めない。

どんな犠牲を払つてでも、何を失つことにならひつとも。

いつか報われる、その日を夢見て。

Prologue (後書き)

今回はプロローグということで短くさせていただきました。

1話あたりの文字数なのですが、基本5'000字～10'000字を目標に書いていきたいと思います。

まだまだ、至らない所はあるでしょうが、温かい日でよろしくお願ひします。

次回予告

眼下に広がる地獄絵図。
ぶつかり合う灰色の魔術師と黄金の騎士。
救助活動を行う少女たちは
謎の魔導師に出会う。

魔法少女リリカルなのはStrikers～灰より生まれし王～

第1話　『空港火災』

テイク・オフ！

第一話 空港火災（前書き）

初つ端からアクセス数が迷走中な今日この頃。
読者の皆さんのが期待に添えてないのが原因と思われます。
作者は誠意誠意を込めて対応していきます。

そんな訳で更新日を前倒し！

日曜日までに次が書き終わるでしょうか……？

燃え盛る炎

泣き叫ぶ子どもたち

怒号の飛び交う火災現場に現れた謎の魔導師

彼らの

彼女たちの

目的とはいつたい？

魔法少女リリカルなのはStrikers～灰より生まれし王～

はじめります

第一話 空港火災

天高く舞い上がる炎塵。

飛び交う怒号。

絶え間なく爆音が響き、獄炎が視界を埋め尽くす。

その日、首都グラナガンの玄関口でもある第八臨海空港は異様な喧噪に包まれていた。

人が賑わう夕刻に発生した空港火災。

火の手は瞬く間に広がっていき、消火活動が始まった頃には空港全域へと燃え広がっていた。

今もなお、ターミナルには人が閉じ込められ、救助を待ち望んでいる。

そして、火災の中心地である貨物置場。

何者かによつて結界が張られている。

結界の中では炎がうねるようにな渦巻いていた。

その一角で異質な空氣を放つ者がいた。

灼熱の大地に映し出されるは一対の人影。

片や黄金の剣を手にし、黄金の鎧が威光を放つ。

片や鈍色の剣を構え、灰色のコートをはためかす。

爆発。

地を埋め尽くした炎が渦を巻き、燃料タンクを飲み込んだのだ。生み出された膨大なエネルギーが熱となり、炎と化し、二人に容赦なく襲いかかる。

忽ち、辺り一帯は爆炎と閃光に覆い尽くされた。

次第に爆炎が晴れていき。

。

そこに映し出されたのは相も変わらず剣を携える一人の姿。爆発に飲み込まれたというのに何一つ傷がない。

「貴様に聞きたいことがある」

「なんでしょうか」

騎士が口を開く。

「俺などに構つていいのか?」

「と言いますと?」

騎士の質問に魔導師は疑問で答え返す。

「この惨状を納めるのは貴様の仕事ではないのか?」

「いえ、わたしの仕事はあなた方を逮捕することですから

魔導師は肩をすくめて見せる。

仮にも管理局の人間。

世界の正義を司る者たちだ。

魔導師には目の前で消えそうな命の灯を守る義務がある。

一方で、課せられたのは犯罪者の捕縛の任務。

広域次元手配犯であり、密輸物の強奪未遂及び特定遺失物損壊等々の現行犯である騎士を見逃す訳にはいかない。

義務と任務、その一つに板挟みとなつた魔導師。だが、迷うこととはなかつた。

魔導師が選んだのは捕縛の任務。命を救うという選択肢を切り捨てて。

「それに管理局の優秀な魔導師さん達や彼らが動いてくれていますから」

魔導師は燃え盛るターミナルビルを見上げ微笑んだ。

空港内を飛び回る巨大な魔力。

躊躇なく、任務を取つたのはこのためだつた。

「ならいい

騎士は納得の表情で話を締めぐくると、手にした黄金の剣を構えた。

魔導師も構えを解くことなく、一層のこと剣を強く引き絞つた。

△△EXPLOSION△△

デバイス達は主の意図を汲み、魔力を供給する。

そして、二人の足元には古代ベルカ式の魔方陣が展開される。

「今日こそ、あなたを逮捕させて頂きますよ、レオンー！」

「二重に断らせてもらおうつーー！」

二人の姿が搔き消える。

その場に残つたのは強大な魔力。

再び姿を現したのは一人を分かつ中間地点。

交わる剣。

そこで、灰の魔術師と黄金の騎士は壮大にぶつかり合つた。

* * * * *

「レイジングハート！」

〔救助対象接触まで、あと40メートル〕

（待つて！　いま救助に向かつからっ！…）

狭い通路を縦横無尽に駆け回る少女。

白いバリアジャケットを展開し、杖を携える若き魔導師。
本局武装体の『^{アス・オブ・エース}不屈のエース』・高町なのは。

休暇を利用して、友人に会いに来ていた彼女はいま、近隣で発生した空港火災の現場へと駆り出されている。

〔次の通路を右です〕

「うんっー！」

瞳に映る強い意志。

一人でも多くの、いや火災に巻き込まれたすべての人を救おうとする意志が感じ取れる。

「いたつー！」

「…………おねえちゃん…………おかあさん…………」

彼女の目に飛び込んできたのは十歳程度の女の子。青髪を揺らして泣きじゃくっている。

「マスター！！ 前方より高魔力反応！！ 来ます！！」

「？」

Protection }

危険を告げる愛用の杖。

なのはは咄嗟にシールドを展開する。

「...」

苦悶の表情を浮かべるのは。

まるで刃のようなくらい研ぎ澄まされた魔力が襲いかかる。

「！？ 女の子っ！？」

重大なことに気付くのは。

の
だ。

ましては前方にいる女の子がこの魔力に襲われたら……。焦りがなのはを支配する。

マスター！！

「あつ！」

それがまづかった。

一瞬とはいえ集中力が乱れてしまったのだ。
急展開したシールドが持つはずもなく

「ダメッ！！」

崩れ去った。

もう、なのははを守るものは何もない。

「 っ！」

^ Remote Shield

目を瞑るのは。

だが、予想した衝撃はいつまで経っても訪れない。

^ Load cartridge

「ふえ？」

微かに聞こえてきたのは、レイジングハートではない男性型の機械声。

なのはが目を開けると一寸も違わない至近距離に銀色のシールドが輝きを放っていた。

「な、なにつ！？」

シールドはなのはに襲いかかってきていた金と灰の一色の魔力と拮抗したのち、お互いが打ち消しあつて姿を消した。

「前方に」一つの生体反応

一つは要救助者の少女。
なのはが少女の目を向けると、少女を守るよう半球状の銀色の
バリアが張られていた。
怪我は無いようだ。

そして、もう一つの生体反応。

(たぶん、こっちが)

なのは達を守つた魔導師に間違えない。

「前方左手斜め45度……反応ロストしました」

レイジングハートの落胆した声。

なのはが見たときには、すでに誰もいなかつた。

(せめてお礼が言いたかつたな)

魔導師がいた場所を見つめ続けるなのは。
姿を消した魔導師に少女の思いは届くことはない。

「マス、タアー？」

慰めの言葉を掛けよつとするレイジングハート。
その声は突如、上擦つたものへと為り替わる。

「ど、どうし」「

「前方の像が崩壊。」のままでは女の子が巻き込まれます…

崩れいく像。

悲鳴を上げる女の子。

いまやるべきことは一つしかない。

瞬時には判断する。

「レイジングハート…！」

{A11_right_my_master}

気持ちを切り替え、女の子を助けるべく、なのはは魔法を使するのだった。

* * * *

「わかった。気を付けてみるよ

黒のバリアジャケットに身を包んだ金髪の少女、フェイト・T・T・
ハラオウンはウインドーを閉じた。

フェイトが向かうのは、8番ゲートからエントランスホールに向
けの通路。

先ほど救助した方々の情報によると、魔導師の女の子が一人妹を
探しに行つたそうだ。

「バルディッシュ」

フェイトは相方でもある斧型のデバイスに声をかける。

「辺りに生体反応なし」

「もう少し進んだほうがよさそうだね」

探している目標は二つ。

片方は要救助者である魔導師の女の子。
もう一方はなのはから報告のあつた謎の魔導師。

なのはを助けてくれたそうだが、姿を消した、と言つあたりが何か気になる。

もちろん、救助を手伝ってくれているという可能性もある。
だが、そうだとすればこちらに接触することなく救助活動を行つてているのは不自然だ。

管理局側と協力すれば、多くのバックアップもあり迅速に救助が行えるはずなのだから。

それなのに、姿を消したのには理由があるはずだ。
この火災の原因を知っているのかもしれない。

と、フェイトは執務官の経験則から踏んでいた。

「生体反応を発見。ルート検索します」

「お願い」

優秀なデバイスであるバルティックシユはすぐさまルートを割り出
す。

フェイトはその指示に従い目的地に辿り着く。
そして、フェイトの目に留まったのは。

「スバル、スバル返事して……お姉ちゃんが……すぐに、助けに行
くから」

床を必死に這い動いつとする青紫色の髪をした女の子。

「そこの方、じつとしてて……。」

女の子に注意を促すフュイト。

「いま、助けに行くから」

フュイトが助けに向かおうとしたその瞬間。
女の子のいる地面に亀裂が入り
瞬く間に崩落した。

「はっ！」

重力に引かれ落下する女の子。
それを救出すべく動き出すフュイト。

{ Sonic Move }

相棒のバルディッシュがサポートする。

{ Circle Protection }

「ホールディングネット」

フュイトが駆け出すと同時に聞こえてきた声。

若い男の声と女性型の機械声。

フェイトが要救助者の女の子を見ると、女の子を守るかのよう漆黒の半球状のバリアが張られていた。

それもフェイトの進入コースを妨げることがないようにだ。

「きやああああああ——」

響く女の子の声。

フェイトは女の子を優しく抱きかかえると重力に逆らい上昇を始める。

女の子が落下した時のためだろうか。

下方にはやはり、漆黒の網状の緩衝材が張られていた。

「バルデイツシユ」

〔前方真上に人影です〕

上昇を続けるフェイト。

遂に魔導師の姿を捉える。

漆黒のバリアジャケットに短髪の黒髪。

そして、朱の瞳を持つ中性な顔立ちの少年がそこにいた。

「待つて！ そこの中！――」

フェイトの声を聞いた少年はピクリと反応する。その顔には失態の色がありありと浮かんでいた。

「一体君は何者なの？」

フェイトはバルデイツシユを少年に向ける。

「和平の使者は槍を持ちません」

{ Schatten Bewegung }

フヒイトの軽率な行動を咎める少年。
足元にはベルカ式の魔方陣が浮かび上がった。

「待て……」

少年に制止を求めるフヒイト。
だが、すでにとき遅し。
少年は影に沈むように消えていった。

(彼はいつたい……)

フヒイトの頭に謎が浮かぶ。

邪魔する訳でもなく、逆に手助けまで行つた少年。
彼の目的が分からぬ。

「あ、あの。助けて頂いてありがとうございます」

「あつ、うん」

要救助者の女の子に声を掛けられ、フヒイトはやるべやることを思い出したのだった。

* * * *

「おせいな」

現場の指揮を任せている壮年の男ゲンヤ・ナカジマは、いま上がった報告の内容に毒づく。

報告を行つたのはまるで人形のような小人の少女、リインフォース？。

一人は指揮通信車に乗り込み情報の整理を行つていた。

「要救助者は？」

ゲンヤは隣に浮かぶリインフォースに問いかける。

「あと二十名程」

リインフォースはモニターに田を走らせる。

「魔導師さんたちが頑張っていますから、なんとか」

リインフォースは休むことなく手を動かし続ける。

「最悪の事態は回避できそうか？」

「…………」

ゲンヤの質問に答えないリインフォース。

リインフォースは無言のままモニターを見つめ続ける。

「どうした？ おひびの姫曹さん？」

心配になつたゲンヤが声をかける。

「先ほどから気になる反応があるんです」

「どれだ？」

リインフォースは次々と画面を切り替えていく。

「時よりですが微弱な魔力反応があちらりこちらで出でこます」

「お前さんたちじやないのか？」

ゲンヤが言つのはなのは達のことだ。

「いえ、識別反応が無登録なものばかりです」

「つまり管理局じゃない人間が動いているのか？」

「そうなりますね」

「やつかいだな」

ゲンヤは顔をしかめた。

確かにこの空港には、時折密輸物が入つてきていたのだ。
検挙してもそれは後を絶たない。

もし、そういうた類の物を狙う輩なら、現場が混乱している時に動くこともだらう。

「他に何か情報は？」

ゲンヤは次なる情報を求める。

「これは別のものになるんですけど……」

リインフォースはまた新たな画面を開く。

「貨物置場のほうなのですが結界が張られているんですよ」

「結界？」
「こんなとこでに誰が張つたんだ？」

結界を張るのは不思議なことではない。
しかし、誰が何のために張つたかが問題なのだ。

「分かりません。ただ……」

「ただ？」

「ここが火災の中心地点だと思われます」

一
そ
う
か

ケンヤはひとまず納得の言葉を口にする。

縦界の種類は……古代ヘルガ式！？

結界について調べていたリインフォースは驚きの声を上げる。

「す、ご、い、で、す！　こ、ん、な、物、を、誰、が、！、？、」

突如、鳴り響くアラート。

赤く点滅する文字がその危険度を現していた。

「いったいなんだ！」

「空港内に無数の魔方陣が展開つ！！！ もうにオーバーランク魔導師が新たに3・4・5つ！！」

「な、何が起きている」

明らかな異常事態。

ただでさえ貴重なオーバーランク魔導師がいきなり5人も現れたのだ。

管理局がゲシュタルト崩壊しそうな数だ。

「空港内の生体反応、謎の魔導師を除き全てロスト」

「どういうことだ！」

続けざまに起こる異常事態。

要救助者も含め、消火や救助を行っていた管理局員、数百人が消えたのだ。

「あつ、いえ、バイタル良好。皆さん、御健在です」

「コンソールを叩き続けるリインフォース。

「場所は百メートル後方。転移します！」

「そ、そつか」

もはや、口元を引きつらせる」としかできないゲンヤ。
おそらく、この転移を行ったのは謎の魔導師たち。
やつていることは桁違い。

それで以つて、目的は不明なのである。

「オーバーランク魔導師2名の反応ロスト… 転移したものと思
われます」

リインフォースは矢継ぎ早に報告を続ける。

「続いて、残りの魔導師が上空三方向に分散していきます」

「モニター出るか?」

「ダメです。全てやられています」

その姿をせめて目に焼き付けておきたい。
そんな願いも叶わないゲンヤであった。

* * * *

「何が起きとんやー?」

驚嘆の声を漏らすのは白い騎士甲冑を身に纏い、背中に二対の黒
き翼を羽ばたかせる少女。

八神はやては眼下で繰り広げられる光景を見て目を丸くする。

青、銀、黒の色をしたそれぞれの魔方陣が空港を埋め尽してこ
るのだ。

「みな、退避せー。」

はやての前方にいる魔導師に指示を送るが……。

「そんな……」

魔法陣に吸い込まれるようにして逝ってしまったのである。

「どないしたうねえんや」

一人嘆くはやて。

田の前の空港火災に途方に暮れる。

「つべ」(べ考へてもしゃあない)

はやてが気持ちを切り替え杖を構え直した時。

「(はやてちやん聞こえますかー)」

「(コインーー)」

リインフォースからの念通が届いた。

「(いまだにいるですか?)」

「(動いてないで)」

「（第3ブロックの辺りですか？）」

「（ルービック）」

はやてはラインフォースと確認を取つていぐ。

「（やつせの魔方陣はなんやつたん？）」

「（おれらへ、転送用の魔方陣かと）」

田の前に浮かんでいたのは転送魔法陣。
はやてはともに消火に当たっていた魔導師が田の前で消えた理由
を理解する。

「（やうなんか。転送された人は無事なん？）」

「（ぬれん、）健在です～）」

リインフォースの間延びした声。

はやてはほつと安心して、肩の力を抜いた。

「（なのせがやんヒュイトやけなんばどないしたん？）」

「（なのはせんはぬれんと一緒に飛ばされて後方に。フュイトさん
は反応のあつた魔導師を追つてもらっています）」

ひとまず、なのはもフュイトも無事なようだ。

「（ハヤシタラええ？）」

「（はやてちやんの方向に、転送魔法を使つたと思われる人物が向かってきています。はやてちやんにま、なのはさんと合流してもらつて、これの対処をお願いするです）」

「（「解や）「

リインフォースの指令を受け、なのはと合流すべく動き出すはやて。

黒き翼が羽ばたき、漆黒の矢羽が舞う。

「（なのはさん）

「（はやてちやん）」

なのはとの念通を始めるはやて。

「（とりあえず、無事でええか？）」

「（うん）」

念通のむこうからなのはの元氣な声が響く。

「（第3ブロック上空で合流や。こかるか？）」

「（大丈夫！ 任せとこーーー）」

「（ほな、待つとる）」

「（「解つーーー）」

第3ブロックの上空に待機するはやて。
そこに現れたのは 。

「あれ、魔導師さん？ あなたは転移しなかったのですか？」

アッシュグレイの長髪をなびかせ、グレイコートを羽織る魔術師
であった。

第一話 空港火災（後書き）

少しでも「期待に添える」とはできたでしょうか？

小説を書いていて思うのですが言葉とは難しいものですね。英語が苦手で、ドイツ語、ロシア語を翻つた程度でしかない作者は痛感します。

それと、はやての関西弁、おかしなところはなかつたでしょうか？独特の発音。
取得するまで時間がかかりそうです。

????「俺の出番が少ない」

作者「空氣を読んでください」

????「主人公がこの扱い……酷くはないだろうか？」

作者「我慢です」

????「…………」

次回予告

報道されるのは本局魔導師の活躍

対応の遅いミッド地上本部

働いたのは初動の陸上部隊と謎の魔導師たち

少女たちは考え

新たなる決意を胸に行動を開始する

魔法少女リリカルなのはStrikers～灰より生まれし王～

第2話　『決意、そして設立』

テイク・オフ

第一話 決意、そして設立（前編）（前書き）

投稿最初の週から日曜の更新間に合わず oren

一日遅れの更新ですみません m(—)m

静寂を取り戻した空港

残つたのは後ろ髪を引かれる想い
あの人その後ろ姿を見上げて胸に抱いたのは
湧き上がる切望
そして時は過ぎ
わたし達は最初の一歩を踏み出す

魔法少女リリカルなのはStrikers～灰より生まれし王～

はじめります

第一話 決意、そして設立（前編）

『 本局の航空魔導師隊の活躍により民間人に死者は出でおりません』

「やつぱりな

聞こえてきたテレビの報道にひとり愚痴るはやて。

空港火災の救助要請から一夜明け。

なのは、フェイト、はやての三人はベットに身を預けていた。

「つ、ん？」

疑問の声を上げるのは。

就寝前といつともあり、シャツ一枚とかなりラフな格好をしている。

枕元ではリインフォースがいびきを立て爆睡していた。

「実際働いたのは災害担当と初動の陸上部隊と、なのはちやんとフエイトちゃんやんか」

はやは報道の内容に不満を顕わにする。

後からやつてきた本局の魔導師隊の活躍もあり、火は消し止められた。

だが、この火災で死者が出なかつたのは、火災発生当初から尽力した者達の功績でもあるのだ。

報道の内容に嘘はないが、はやての本意にそぐわないものであつた。

「あははは……まあ休暇中だつただし」

「民間の人たちは無事だつたんだし」

不満を垂れる親友を諭そうとする、なのはとフロイト。皆が無事であればいいといふのは何とも彼女達らしい考え方でもあつた。

「わやわや……」

「口」もゐはやじ。

彼女は彼女で思ひ」とがあるようだ。

「まあまあ、はやてちやん

「やつこえぱ、あの魔導師君も救助を手伝いをしてくれていたんだよね

フロイトはモニターを開く。

そこに移し出されるのは青紫色の髪をした女の子を救助した時に出会つた少年。

その姿が余るひなくを収められていく。

「あれ？ フロイトちゃんのまつは無事だつたらやねん」

小首を傾げるはやじ。

「うん、この映像はバルティックシユが隔離してくれていたから助かつたんだ」

残念そうに首を振るフロイト。

フロイトはこの空港火災の最中に一度、この少年と遭遇している。一度目の遭遇で少年は何らかの手段を使い、バルティックシユの中に残る映像記録を消去したのだ。

「やつか。うちのほうは映像記録はあるんやけど……」「

はやはは自身が謎の魔導師と遭遇した時の映像を展開する。

「こがあつやめや

映像全体に広がる砂嵐。

音声は拾えているものの、映像はまともに見れたものではなかった。

「でも、フロイトやことおやじさんは魔導師さん達とお話をできただよな」

一人、杞憂のなのは

なのはは声をかけることすら許してもらえないなかつたのだ。

「話つちゅうつかな……」「

「うひのちの話はほととじ無視されちつたんだけね

言葉の擦れ違い。

それは、魔導師達がフロイト達の話を聞く気がなかつたからともいえる。

「こやはは、なんだ……」「

落胆の色を隠せないなのは。

もしかしたら、自分を助けてくれた魔導師のことを聞けるかもしれないと、思つていただけにショックは大きい。

「なのはちゃんは魔導師さんに助けられたんやよね」

「うん……要救助者の女の子と一緒にね」

なのはが思い出すのは銀色のシールド。

ミッドチルダ式であるそのシールドには、人を魅了させるような綺麗な魔力光。

それでいて、堅牢な硬さを備えた防御壁としての役割を十分に発揮していた。

「助けに行つたのに、逆に助けられて面白ないかな……」

なのは自身が注意を怠つた結果、女の子にまで危険が及んでしまつた。

もし、魔導師さんに助けてもらえなかつたら……。

後悔の念がなのはを蝕む。

「そんなことないよ」

「でも……」

「なのははなのはにできることを精一杯したんだ。それで一人も死者が出ることなく、多くの人が助かつたんだ。なのはが気に病むことなんてないはずだよ?」

「フロイトちゃん……！」

生き生きとした表情に戻るのは、
その瞳にはすでに失意の色はない。

(対応の遅い地上本部…………魔導師達さんが居らんかつたら被害
が大きくなつとつたのは明白や。魔導師さん達みたいに、少数で迅
速に事を解決できるエイキスパート達。それが管理局にあらへん。
彼女達みたいにうちらも動けたら……)

その一方で、はやはては新たな野心を抱き始める。
動機となつたのは心に焼きついた魔導師達の所業。
意識は記憶の中に沈んでいくのだった。

* * * *

「あれ、魔導師さん？　あなたは転移しなかつたのですか？」

立ち上る炎塵によつて、真つ赤に染まつた空港。
第三ブロックの上空で待機していたはやはてのもとに澄んだ声が届
いた。

そして、はやはての瞳に映るのは。

(「うつう美人さんやな）

はやはてが魔導師と出合つた時の第一感想であつた。

手足は細長く、長身でスレンダーな女性。

彼女を覆つグレーのロングコートにはしわひとつでない。
コートの袖から垣間見えるのは、まるで硝子を連想させる透き通
った柔肌だ。

そして、据えるのは琥珀色の瞳。

精悍な目つきと端正な目鼻立ちは造形美を思わせた。

何と言つても特徴的なのはその雰囲気だろう。

頭の先から爪の先までグレーで統一されたその身立ち。

凛としたたたずまいが、近寄りがたい空気を醸し出していた。

「答えないのならそれもいいでしょ？」

魔導師は虚空から魔導書を取り出す。

（何かをしでかすみたいや）

はやては魔導師に杖ショベルトクロイツを向ける。

「ちよい待ちいや。自分はなにもんや？」

「名を聞くときは自分から名乗るのが礼儀ではないでしょうか？」

はやてとの対応を片手間に魔導師は魔導書を開く。
礼儀のことを言つなら本人も言えたことではない。

「管理局本局特別捜査官のハ神はやて一等陸尉です」

律儀にも魔導師に向けて、名乗りを上げるはやて。

「ハ神さんですか」

「いつは名乗ったで、次は自分の番や」

名乗りを上げたはやてに構わず、魔導師は魔方陣を開く。

「なにしどんねん！？」

「生憎、いまは名乗る名がないものですから」

空港内からの激しい閃光が迸り、爆風が魔導師を襲う。
灰を落としたような薄暗い色をした黒髪。
それでいて絹糸のように精錬された魔導師の長髪が舞い踊った。
「消火するので、邪魔しないでもらいましょうか」

「なつ…？」

驚きの声を上げるはやて。

彼女の手足のかかる環状型の魔方陣。

幾重にもめぐらされたバインドがはやてを拘束していた。

(二つの間に……)

自負しているわけではないが、はやは一流の魔導師である。
それが簡単に拘束されているのだ。
気づく暇もなく。

(一体、なにもんや)

焦りを募らせるはやて。

一方で、バインドをかけた魔導師は涼しい顔で乱れた髪をなぞられていた。

「自分は何をしてるんか分かつとるんー…?」

魔導師に向けて必死に声を上げるはやて。

既に魔導師の足元にあるベルカ式の魔方陣は完成されつつあった。

「自分がしどんのは公務執行妨害、並びに指定空域での無許可魔法の使用やでー！」

はやては魔導師の行動が違法行為であることを訴える。
だが……。

「まずは拘束から抜け出したほうが宜しいのではないでしょうか？」

魔導師ははやての言い分を歯牙にもかけていない。

それもそのはず。

はやての肢体にかかるバインドは一向に外れる気配がないのだ。

「くつー。」

はやては歯を噛む。

幾重にもかけられたバインド。

ミッドとベルカの混成でありながら、驚くほど緻密に強固に編み上げてある。

正攻法で解除していたら、どれほど時間が掛かるか分かつたものではない。

「砕け バインドブレイクーーー。」

はやては両手両足に魔法陣を展開する。
展開された魔法陣が内側からバインドを破壊する。
はずだったのだが……。

「うわわーーー！」

田の前で起った結果。

はやてはその結果に驚嘆する。

バインドはひび一つほころ」となく、びくともしなかったのだ。

「そんな簡単には解けませんよ」

術者は語る。

「特製のバインドですから」

その程度で壊れる」とはないこと。

「もう一度聞く、自分はなにもんや？」

返つてくる答えは分かりきつてこる。

しかし、はやてはそう問わずにはいられなかつた。

「先ほどもお答えしたはずなのですが……」

魔導師は嘆息する。

まさか、同じことを再度聞かれるとせ思つてもいなかつたのだろう。

（つ。

「まあ……」

魔導師はくすりと微笑む。

「もう一度会いまみえたときには必ずお答えしましょ」

（反則や……）

凛として人を近づけない雰囲気のあつた魔導師。
その魔導師が初めて見せた女性らしい華やかな笑顔。
はやは美麗な笑顔に魅せられてしまっていた。

「そろそろ始まりますよ

「へ？」

魔導師の顔に見入ってしまったはやて。
突然、言葉を掛けられたことで声が裏返つてしまった。

「特等席にいるのですから、見ていて損はないでしょう

魔導師は空港を見るように促す。

そこにあつたのは

。

「なつ……ー」

辺りを照らす銀の光。

空港を囲むほど大きな正三角形の魔方陣。

魔法陣の中では剣十字の紋章が回転していた。

「自分らは何をするつもりや……」

「いいから黙つてみてなさい」

「うう~

魔導師にぴしゃりと言いつけられ唸るはやで。
いまから行われるであろう凶行を止めようにも、バインドに拘束
されたままでは文字通り手も足も出ない。

「始まりましたよ」

魔導師が開始を告げる。

魔法陣から眩いほど銀の光が放たれる。
そこで空港全体に変化が現れた。

炎が逆巻き真っ赤に染まっていた空港が凍りつき始めたのだ。

「順調ね」

白い吐息。

はやて達の周りにも冷気が漂つてきていた。
凍結魔法の余波が来たのだ。

そんな中、魔導師は眉をひそめた。

「一射目が遅いですね」

何か手違いがあつたようだ。

「あ、あのっ…」

恐る恐る尋ねるはやて。
まだ十代半ばの少女。
怒られて縮こまるのは当然ともいえる。

「一体、あなた達の目的は何なんや?」

改めて考え直してみた結果、はやてはこの魔導師が悪い人には見えなかつた。

先ほどまでの救助活動。

空港内にいた人を転送し、はやてを拘束したのは邪魔にならないよつに。

そして、いま行つてゐる消火活動。

よく考えれば辻褄が合つのだ。

ただ、そうなれば目的が分からぬ。

魔導師が管理局員もどきの行為を行つてゐる理由が……。

「目的でしょうか……」

魔導師は、はやての問いに少し考へたのさ。

「分かりました、教えましょう。先ほど名乗つて頂いたお返しもしてませんから」

たたずまいを直す魔導師。
はやても息を呑み、答えを待つ。

「この事態を防ぐことができなかつた罪滅ぼし、と言つたといふので

す

「なんやで……！？」

予想外な答えに動搖するはやで。

「さて、じいじら辺で問答は終わりです」

「ちよい待ちいな！..」

はやはては真相を聞けりと制止を試みる。
だが、はやはてのことを無視して魔導師は空港に向けて手を掲げた。
仕方なく、はやはても空港に目を向けることにした。

「つ！」

眼下に広がる光景。

移り変わった空港の様子に、はやはては目を見張る。

おそらく問答をしていた間である。ひりつ。

空港には小さな氷山があちらこちらに出来上がりつていたのだ。
それでも、まだ火は完全に消えていない。

「天よりの恵み途絶えて

「…………」

空港内で燃つている炎に向けて魔導師は凍結魔法を放つ。

それも詠唱中にだ。

てつきり儀式魔法の一種だと思つていたはやはては、絶句で物が言

いえなくなる。

ベルカ式魔法陣から放たれた凍結魔法は空に灰色の軌跡を描いて
いき、分散する。

そして、食えた獣が餌を求めるみたく、炎に向け疾駆していく。

「解き放たるは餓える獣」

疾駆していた魔法弾が炎を飲みこみ

。

白銀の閃光が空港を覆いつくしたのだった。

第一話 決意、そして設立（前編）（後書き）

今回は長々となつたので前編と後編に分けさせていただきました。

更新遅れの申し開きをするとしたらこれが原因です。
文章が短くまとまりません。o_r_n

さて、後編は日曜更新します。

今度こそ絶対に更新して見せます！！

それではまた！

第一話 決意、そして設立（後編）（前書き）

初めての予約投稿。

うまくいったでしょうか？
心配です。

成功したこと信じて。
それでは、後編の始まりです。

第一話 決意、そして設立（後編）

魔導師が一撃を加えたその結果。

凍てつくような冷気が空港を。

莫大な氷霧がはやて達の視界を支配する。

「…………」

もはや、はやてに語ることはあるまい。

視界を覆っていた濃い氷霧が晴れしていく。

そこには静寂に包まれた空港が残るだけであった。

炎が燃っていた場所には巨大な氷の造花が咲いているのは愛嬌か。

「終わつたでしょ、うか？」

「自分が終わらせたんやろーーー。」

魔導師の呟き。

その呟きに透かさずつっこみを入れるはやて。

魔導師が続ける奇行に、とうとう堪えきれなくなつたのだ。

「まだだつたみたいですね」

またしてもはやての言つことを見渡す。

魔導師は一足で、はやてとの距離を詰めてきた。

「失礼しますね」

「な、何してん

」

返事を聞くことなくはやてを抱き寄せる魔導師。

何を思つたか、はやてを抱き寄せるとすぐさまシールドを張つたのだ。

「衝撃に備えてくださいね」

回された手は強くはやてを抱き寄せていた。

それがはやてにただならぬ事態が起きていたのだと理解させてくれた。

はやては言われた通り、身を屈め衝撃に備える。

「ううう……」

目を瞑りたくなるような闪光。

耳を塞ぐ轟音。

はやての手に自然と力がこもる。

しづめりくして

。

「やはり、もう一つありましたか

真っ赤に染まる空港を見て、魔導師が憎々しげに独り言を口にする。

「うひこひこひせ

聞き始めるはやて。

魔導師を視線で射止める。

その格好は身長差もあり、自然と上位遣になつた。

そんな、はやてに魔導師は凜とした聲音で告げる。

「まずは私の手を放してください」

魔導師が指摘するのは口を開いた張るか細い手。
はやは知らず知らずの内に魔導師のホールドをしっかりと強く握っていた。

「うーん？」

はやは慌てて手を放そうとするがそこまであることに気付く。

（バインドがあらへん？）

さう、はやは腕にかかるていたはずのバインドが軒並み無くなつていたのだ。

足のほうにかかるているのはそのままであるが。

（もしかして……魔導師さん……）

先ほどの爆発の時。

はやはが怪我をしないうちに最低限のバインドを除いて解除したのだった。

意外と優し性格なのかもしれない。

「話してからや」「やめては」

はやはは一ヤこと笑みを浮かべる。

「圧倒的の状況が不利ないま、心は痛むがこれを利用しない手はないかった。

「バイオンドの数を倍にしますよ」

「それでもや」

はやはては決して譲らない。
「のときを除けば話を聞く機会がなくなってしまつ恐れがあつた
からだ。

「駄々つ子みみたいな真似をしないでください」

「なんとでも言つがええねん」

余裕の表情を浮かべるはやはて。

対して、魔導師は精神的に追い詰められていくよつだった。

「早くその手を放しなさい、子狸さん」

「」、子狸はあらへんよ！――」

だが、この魔導師。

追いつめられてなお、体を崩すことにはなかつた。
それに加え、反撃とばかりに放つて射た一言が見事にはやての
心を打ち抜く。

「うひ、めつちや傷ついたで

魔導師が放つた一言に崩れ落ちるはやはて。

子狸。

何故かここ最近になつて、管理局内で密かに囁かれるよつこなつた、はやての仇名である。

「ほんと、傷ついたで」

はやては瞳を潤ませて魔導師に迫る。

「失言があつたようですね。そのことについては謝りましょっ」

詫びを入れる魔導師。

しかしながら、その態度はとてもではないが謝つていろよう見えなかつた。

「話してはくれへん？」

「ほんの事情もあるので、それは無理ですね」

はやては「いじぞ」と言わんばかりに涙田のまま攻め寄る。対して、魔導師の答えは変わらない。

「その事情を聞かせてくれへん？」

「無理ですね」

平行線をたどる話し合つ。

「やつか……」

顔を俯かせるはやて。

魔導師はその態度に眉をひそめた。

「なり仕方あらへん」

顔を上げるはやで。

そこには一ソマリとした笑みが浮かんでいた。

「無理やつにでも」

「

はやての両足を拘束していたバインドが砕け散る。
これで、はやてを拘束するものは何もなくなったのだ。
魔導師は咄嗟に距離を取るひつとする。

「 聞かせてもらひついでーー！」

杖を構え直すはやで。

バインドが魔導師に襲いかかっていく。

(どうやら…)

完全に不意を突いた攻撃。

それでも、はやての意識は酷く張っていた。

先ほどから見せられている実力差。

暗に魔導師が逮捕をあきらめようとほのめかしているようなものだ
つた。

その予測を裏切ることなく、魔導師は綺麗な体さばきでバインド
から抜け出しつく。

されど、魔導師の不意を突いたのは大きかったのか。

魔導師の左足がバインドに捕まる。

今はやじことつてしまはれだけでも僥倖であった。

「刃を以て、血に染めよ。穿て、ブラッティダガー」

数十本もの短剣が魔導師を取り囲む。

「悪いことはいわへん。素直に両手を上げいや」

投降を促すはやで。

それを聞いた魔導師はびくともしていない。
はやてが放った短剣に囲まれているにもかかわらずだ。
むしろ、その様子を田にしたはやての方が気圧されつつあった。

「わたしを捕まえる前にやるべきことがありませんか?」

魔導師は炎の勢いが、ぶり返しつつある空港に田をやる。
ついでにはやてもそちらに田を移した。

(魔導師さんが言いたいことは分かるんや。でもな……)

なにも凍結魔法が使えるのは魔導師だけではない。
広域攻撃魔法。

これがはやての得意とする分野である。

「魔導師さんを捕まえた後で、さしあつ

「

「甘いですね

「なつ！？」

目を戻した先。

そこにいたのは左手に新たなデバイスを携えた魔導師。剣状のデバイスから薬莢が排出されると魔導師が動いた。

一閃。

魔導師は優美に剣を薙いだ。

たったその一撃。

その一薙ぎによつて、魔導師を取り囲んでいた短剣が打ち砕かれ
る。

「つ！」

魔導師は止まらない。

右手の魔導書を空に放り、流れる動作で疾駆する。
いつの間にか左足を拘束していたバインドは消え去つており、驚
きを隠せないでいるはやての懐に魔導師は踏み込んだ。

{ Schwarze Wirkung }

「くううつーー！」

苦悶を上げるはやて。

咄嗟に張つたシールドと灰色の魔力を纏つた魔導師の拳がぶつか
る。

一色の魔力がせめぎ合つた結果。

(仕舞うたつ！？)

シールドはいとも簡単に破られ、はやて自身も大きく体制を崩す。
明らかな隙。
追い打ちは防ぎようがない。

はやてが目を閉じる前。
覚悟の前に見たのは魔導師の脇で煌めく剣光。
それは魔導師が構える剣から放たれる禍々しい鈍色の光沢であつた。

「あれ？？」

来る筈の衝撃。

訪れるはずの痛み。

はやてが予期した苦痛が襲つてこない。

状況を確認するべく、はやては恐る恐る薄田を開けた。

「あひーー！」

不意打ちに声を上げるはやて。

頭部に奔る小さな痛み。

薄田を開けたはやてに待つていたのは所謂「パンペーン」である。

「おいたは程々にしてくださいね」

はやてを呆れ顔で見下ろしていく魔導師。

空に魔法陣を描くと再びはやてを拘束する。

「卑怯やでーー！」

肢体にバインドを掛けられたはやてが嘆き声をあげる。

「巧みな話術を使い、人を騙そつとしたお嬢さんが言えることじょうつか？」

「うう～」

「今度はもうじつとしておこでくだわー」

唸るはやてをしり目に魔導師は宙に浮かぶ魔導書を回収する。そのままはやてを放置し、魔導師は詠唱を唱えていた場所まで戻つていった。

「これねはやつ過ぎやで……」

放置されたはやては自身を縛るバインドを調べて呻く。バインドの数が3倍にも、4倍にも増やされているのだ。

「魔導師さんはこいつたい何者や?」

何度も口にしたその言葉。

はやての疑問は吹き飛ぶことない。

「まあええ。今はうひこでたひる」とをしようつか

はやては見据えた。

ベルカ式の魔方陣を開拓する彼女の姿を。

(目に焼き付けといったる)

輝く銀光。

放たれる強大な魔力。

空港の向こう端から一筋の光が伸びる。

一つは魔導師の展開する魔方陣へと。

(せやから……)

そして、もう一つの光線が伸びていった場所。

銀の魔力を放つ魔導師とはやての目の前にいる彼女とを結ぶ対角に当たる位置。

そこから先ほどと同じように、今度は漆黒の光線が伸びていく。

一つは魔導師。

一つは銀の魔方陣を展開した魔導師へと。

(次、会ったときは)

そして最後、はやての見据える魔導師。

彼女の足元から灰色の光線が他の一人に伸びていく。

その三つの魔力光があたかも当然のように絡みついた。

「黄昏の時へと刻み続けよ」

魔導師の詠唱が終わり。

詠唱を完了させた魔導師達三人、それぞれを頂点とする正三角形の魔方陣が夜空を彩った。

(色々聞かせてもらひで……)

はやての固い決意。

それとは対照的に、魔導師は静かに終わりを告げる。

「訪れよ 大いなる冬 フインブルヴェト」

空を覆う広大な魔法陣から放たれた凍結魔法に空間が悲鳴を上げるのだった。

* * * *

そして、はやての意識はベットの上へと舞い戻る。

(えらいことをしようつたな、魔導師さん達……)

いまも脳裏に焼け付くその光景。

最後の魔法の威力には、はやても度肝を抜かれた。
空港だけでなく、空間そのものを凍結させた巨大魔法。
まさに広域殲滅用の魔法といった感じであった。

それよりも

。

(でたらめなことをしようつたな)

はやてが特筆したいのは空に描かれた特大の魔方陣の方だ。
複数の魔術師がそれぞれの魔方陣を用いて一つの魔法を完成、維持させることはある。

特に結界魔法がよい例だ。

だが、魔導師達がやつたのはそんな生易しいものではなかつた。

個々の魔導師資質が異なる為、魔導師がそれぞれの魔力を共有しない、一つの魔方陣を構成するのは不可能と言える。

できても、魔力同士の衝突や綻びによつて魔方陣は消滅してしまう。

例外としてユニゾンデバイスがあるものの、魔導師達はそのようなものを使わずに常識をいとも簡単に打ち破つたのだ。

はやてはその異常ともいえる魔導師達の練度、そして一人一人がお互いに信用できる、その辯に心を奪われていた。

(やつぱり)

はやての中で膨れ上がる想い。

(うちも……うちひの部隊を持ちたい！！)

空で出会つた魔導師。

そして、見せつけられた所業。

形は違えど模範となりうる彼女たちの行動を見て、はやての心は強い切望でいっぱいになる。

災害救助に犯罪対策。

さらにはロストロギアの対策まで。

多種多様な事件にいち早く対応できる、少数先鋭のエキスパート部隊。

今の管理局では難しいのが現状。

だが、これがはやての思い描いた構想であった。

「 あのなあ……なのはちゃん、フュイトちゃん 」

「「「うん?」」

親友の一人を田の前に佇まいを居直すはやて。
彼女は重い口を開く。

「わたし……やっぱ自分の部隊を持ちたいんよー。」

話し始めるのは描いた未来図。

なのはもフュイトも協力を当然のように受け入れた。

そして、少女達は夢に向かつて奔走を始める。

四年後

「IJのお部屋もやつと隊長室らしくなったですね~」

「そやね。リインのデスクも、ちよづかええのが見つかってよかつたな」

体全体を使い、喜びを顯わにする小人の妖精リイン。

それに優しく微笑むはやて。

四年もの月日が経ち、若干ながら大人びている。

「えへへ。リインにぴったりサイズです～」

鳴り響く機械音。

誰かが部隊長室に訪れたことを知らせる。

「はい、どうぞ」

「失礼します」

「お着替え終了やね」

入室するのは、六課の制服に着替えた、なのはとフュイトである。はやて同様、四年前に比べ少し大人びている。

「お二人とも素敵です」

「いやはは

「ありがとうございます、リイン」

制服を見て、会話が弾む少女達。

「さて、それでは

「うん」

なのはとフュイトは踵を鳴らし、敬礼する。

「本日只今より高町なのは一等空尉」

「フハイト・テスター・ラッサ・ハラオウン執務官」

「西畠とも、機動六課に出向となります」

「どうぞよろしくお願ひします

「はー。よりしきお願ひしまさ」

幼馴染の三人は出向のあこがれを終える。

「ふふふ」

「ふふ」

部隊長室には和氣藹々とした空気が流れ。

そして。

「機動六課設立や」

はやては叫ぶ。

思い描いた夢の舞台の始まりを。

それぞれの希望を胸に。

踏み出した一歩を。

第一話 決意、そして設立（後編）（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

さて、作中で魔導師が発動した魔法なのですが……
ドイツ語で『解放の鍵』の意を持たせたつもりです。

『Befreiungsschlüssel』

これに逆言法を用いて、

『Schlüssel Befreiung』

と表記させていただきました。

作者はドイツ語を齧つた程度なので、間違えがあるかもしません。

その時は描寫お願いします。

? ? ? 「俺の出番が一欠けらもない」

作者「ちょっと… そいつ言つネタバレ発言は止めてください…」

? ? ? 「作者！ 前は俺の扱いが不当だと思わないのか？」

作者「我慢です！ 我慢…！」

「…………待て。この不当な扱いを続けてるのはお前ではないか？」

作者「せりへい」

? ? ? 「アイ、セットアップ」

アイ「了解です、主」

作者 ま、待つて

アイ { もう ですね }

？？？「終わったな」

作者「うう」

？？？「まだ生きていたか」

アイ「ゴキブリ並みにしぶといつですか」

作者「次はあなたの出番がありますから」

? ? ? 「 」

アイハ主は寛大ですね』

作者「どこがですか！？」

アイハ次こそ主が

？？？『羊の皮を脱ぎ捨てる』

？？？「黙れ、オウル」

オウルへ相変わらず、冗談が聞かねえ……

次回予告

初めての出動、初めての実戦
胸の奥の小さな不安
かき消すように届いたのは強く、優しい声
そして、現れるは謎の魔導師

魔法少女リリカルなのはStrikers～灰より生まれし王～

第三話『管理局の幽靈』

テイク・オフ

EP・2・50（前書き）

予定外の更新です。

第一話と第二話の間のショートストーリーをお送りします。

本来、人が立ち入ることのない空間。
その暗がりで男は待機していた。

「（調子はどうだ？）」

「（順風満帆です）」

「（警備システムの詳細図を廻せ）」

「（了解です）」

念通に答えるのは少年の声。
低く鋭い男の声に比べると、まだ変声期の迎えていないだらうその声は高くあどけなさが漂つ。

「（ア、送るよ）」

「（受諾しました）」

念通に加わる女性の声。

男の手元でアイと呼ばれたデバイスが光る。

「（なかなかのものだな）」

「（同意します）」

廻ってきた詳細図を見て男は唸る。

田のものを守る機械群。

センサーに強化ガラス等どれも一級品である。

「ほっ……」

念通を忘れ、感嘆の声を漏らす男。

画面をスクロールさせる手を止め、暫し画面と睨み合つた。

「（いかがされましたか主？）」

「（これを見てみろ）」

「（これは…？）」

画面に映し出されているのは耐侵入者用の迎撃装置。

彼らも侵入する上で迎撃装置が守護しているのは予想できた。だが、田の前にあるそれには一つ問題があった。

「（質量兵器の様ですね）」

「（ああ）」

質量兵器。

田下、管理局が管理する世界では使用が禁止されている代物である。

「（ビンゴだ）」

「の建物に入つてから田にする固執した警備体制。
配備された質量兵器。

彼らの探し物、氷界のクリスタルがここにあるのは間違えなかつた。

「（何の為に僕がクラッキングしていると黙っているんですか？）

念通の向こうで少年が口を尖らせる。

「（別にお前がクラックしているわけではないだろ？）」

「（ほ・く・が、やつているんです！…）」

「（アルクはいつの間に嘘つきになっちゃったなかなー？ ソフィー、悲しいよ）」

また新たな声が念通に参加する。

「（失礼な！ 空氣を言わないでほしー！）」

「（仕事の割合はソフィーが八割で、アルクが一割だよ）」

「（アルクはソフィーに頼り過ぎだべ）」

「（くーー。）」

鋭い男の声とソフィーとこの女の可愛らしい少女の声に囁められる少年アルク。

「（それでお前達はいつまで俺をこんな感じに閉じ込めておくつもりだ？）」

「（あと五分！　こえ、あと三分！　速戦即決でやつて見せまやー。）」

「（じつはもう終わつたよ）。あとはアルクだけのだけだよー）」

「（ソフィー手伝つて！　暗号が解けないんだーー。）」

「（こんななんちゅうちょいのちょい）」

「（何でこんな早く！？　……つー　さては謀つたなソフィーー！ー。）」

「

「（レーラなー）」

ただ漏れの念通に男は苦笑する。
ソフィーがいるといつもいこう。

大事な作戦を田の前に、この緊張感のなさは相変わらずなのだ。

「（どうにかなりませんかね）」

「（全くだ）」

男は相方の意見に賛成する。

緊張しすぎて体が動かないのは話にならないが、逆に緊張感が欠けているのも危ない。

「（真面目にしが、ソフィー）」

故に男はアルクの仕事を邪魔していることであらづ、ソフィーに一喝を入れる。

「（む～、ソフィーは自分の仕事を終えてるのに何で怒られないといけないのよー。）」

「（ソフィーがアルクの邪魔をしてくるからだ）」

ソフィーは抗議の声を上げるが、男はそれを許さない。

「（レオのこばず～）」

「（帰つたらメンテナンスしてやるから、アルクを手伝え）」

「（しようがないな～）」

「（頼んだよ）」

途切れる念通。

それに胸を撫で下ろす男レオ。
ソフィーがアルクの手伝いをするのならこの仕事はもはや終わ
ったようなものだった。

「（私のメンテナンスもお願いできるでしょうか？）」

「（ついでだから問題ない）」

「（感謝します、主）」

アイの申し出をレオは快く引き受けた。

「（なら、俺のも頼むぜ）」

レオの左手に握られているデバイスのコアが光り、念通を届ける。

「（お前のは却下だ）」

透かさずレオはデバイスの発言を切り捨てる。

「（待つて！俺が一番、酷使されてんだぞーーー）」

デバイスは不当な扱いを受けていると抗議する。
現にレオの居場所が分からぬように魔法の「コントロールを行つ
ているのだ。

それも複数の魔法を重ね掛けで。

「（便利だからな）」

「（それなら少しは労わってくれーーー）」

抗議の声を強くするデバイス。
話だけ聞くと彼だけ哀れである。

「（十分、労わっているだろ？）」

「（どこの口で言こやがる）」

「（口の口だが？）」

「（分かつた、分かつたさ。旦那がそんな態度を取るなら今すぐ魔
法を解除してやるーーー）」

レオの態度にデバイスが口火を切った。

「（そんなことをすれば、どうなるか分かつているのだろうな）」

冷ややかな目で見下げるレオ。

彼は己のデバイスの反抗を許さない。

「（じょ、冗談だ。ス、スクラップだけは勘弁してくれ！）」

「（この世には言つても良い「冗談」と悪い「冗談があるのを知らなかつたのか？）」

「（す、すいませんでした！…）」

デバイスは神速に頭を下げる。

実際はただコアが光っているだけであるが。

「（謝るぐらいなら初めから言わなければいいのではないか？）」

「（今まで主とデバイスの口論を傍観していたアイが口を開く。

「（腰巾着は黙つてくれ）」

「（ずいぶんな物言いですね、オウル）」

睨み合つ一機のデバイス。

右手のデバイス・アイと左手のデバイス・オウル。主であるレオを挟んで静かに火花を散らし続ける。

「（前々から言おつと思っていたのですが、あなたは主に対する態度がなつていません！）」

「（俺が旦那にどんな態度を取ろうと勝手だろ）」

「（言葉遣いといい、心遣いといい……あなたはマスターに敬意を払うべきです！…）」

「（旦那は旦那だ。これが俺なりの敬意だ）」

「（あなたという人は……！…）」

次第に口論はエスカレートしていく。
デバイス達の口論なのでコアの輝きが増すだけなのだが。

「（そこまでだ、お前達）」

レオは仕方なく仲裁に入る。

普段なら放つておいてもいいが、いまは任務中である。

「（主が仰るなら……）」

「（旦那が言つなら仕方ねえな）」

マスターであるレオの言葉に引き下がる一機のデバイス達。

「（アルクにソフィー。盗み聞きはいいが、準備は終わったのだろうな？）」

そして、目の前の喧噪が終わったことで、彼の意識は姿の見えない

い仲間たちに向けられる。

「（準備万端。 いつでも行けますよ）」

「（システムダウンから奴らが気づくまで五分は掛かるよ～）」

「（上出来だ）」

およそ一分でレオは 氷界のクリスタル を手に入れるつもりだったのだ。

五分もあれば脱出までの時間を入れてもたんまりとおつりが返つてくれる。

「（これよりカウント30で突入を開始する）」

「「「（解…）」「」」

いかがでしたか？

今回の話で主人公達の名前だけ明かされました。

主人公：レオ

レオのデバイス：アイ、オウル

協力者：アルク

アルクのデバイス：ソフティー

と言つたところでしょうか。

これからゆつくりと彼らのことと紐解いていくつもりなのです。

また、日曜日にお会いしましょう。

では！！

第三話 管理局の幽靈（前編）（前書き）

早めの更新です。

今回も新キャラ登場！？

次々と出してすみません m(—)m

それでは！

Take 1

多忙な日々

言い渡される新たな任務

そこには大量の機械兵がいて

未来を担う少女達が奮闘していった

そして、よく顔を知る人物も
やはり今日は厄日か

作者「カアアアアアアツトオオ」

レオ「俺は心の赴くまま言い切つたぞ」

アイバ「主のアドリブを邪魔しないでもらいたいですね」

作者「いや、台本道理に読んでくださいよ（涙）」

レオ「仕方ないか」

アイハ「主が仰るなら」

作者「まさかの take 2 です。どうぞ」

Take 2

潜入捜査の帰り道

言い渡される新たな任務

そこには大量の機械兵がいて

未来を担う少女達が奮闘していた

そして、戦いの場へと

幽霊は静かに舞い降りる

魔法少女リリカルなのは Strikers → 灰より生まれし王女

はじめます

第三話 管理局の幽靈（前編）

～Side レオ～

空を見上げると突き刺すように降り注ぐ朝日。

俺は通勤ラッシュで賑わう大通りを一人歩いていた。

服装は一般的な黒いスーツ。

もちろん執務官が着るような徽章の数々はついていない。

潜入捜査の時まで田立つ管理局の制服を着る馬鹿は少ないであろう。

三日間の潜入調査とそれを元に行われたロストロギアの押収劇はあっさりと幕を閉じた。

手元にある 氷界のクリスタル が何よりの証拠だ。

保管されているケースから取り出した時に、封印が掛かってないことには驚いたが。

驚いたというのは奴らもだろうな。

せつかく密輸して、厳重に保管していたものが盗まれたのだ。

跡形もなくだ。

いや、跡形もなくといふのは語弊があるだらう。
壊された質量兵器、無くなつたロストロギア。

これ以上の痕跡を俺達は残していない。
足がつくこともないだらう。

さて、報告はどうしたものか。

質量兵器にロストロギアと一管理局員として見逃せるものではな

い。

だが、自分が再び出向くのは面倒だ。
極秘に押収せずに部隊を率いて押収に行くべきだったか。
そうすると氷界のクリスタルは手に入らなかつただろうが……。

まあ、いつも通り報告するか。
あの部隊長がどうにかしてくれる。
遣わされた部隊の方々はご愁傷様だ。
バツクにある某大手企業と遣り合つことになるだろう。

となると、明日は久しぶりの休みか。
その前にソフィー達のメンテナンスがあつたな。
まだ、一日は終わりそうになかつた。

〔通信です、主〕

「誰からだ?」

少なくとも同じ部隊の人間ではないと思う。
人が単独で潜入捜査に当たつているのが分かつていて通信を入れ
てくるのは……二人いたな。
非常識な奴らが同じ部隊で二人。

〔エリスからです〕

アイが出した名前に俺は顔をしかめる。

エリス。

本名はグレイ・エリス。

所属している部隊が違うにもかかわらず、面倒な仕事押しつけて
くる厄介な奴。

俺にとつての危険人物トップ3に入る人物だ。

「少し待てと伝えておけ」

大通りを逸れ、小道に人の気配が少ない方へと進んでいく。

「起きる、オウル」

「かあちゃん……まだ眠いよ…………」

人気がほとんどなくなつたところでオウルを叩き起しす。
何やら寝言を言つているがいつものことだ。

「仕事だ、早くしろ」

「結界を張ればいいのか？」

「ああ」

オウルは無駄口こそ多いが、なかなか良い「バイスである。
特に演算では重宝するのだ。

「お休み。昼過ぎまで起さないで」

「勝手にしろ」

「こいつは仕事をやつたのだ。
いまは十分寝かせてやろう。」

「アイ、回線を」

『了解しました』

「ひらの意を汲んでくれるもつ一機のデバイス、アイ。普段はオウルの軽口に突っ掛るのだが、いまはそうしない。アイもこの度の潜入捜査でオウルが頑張ったことを認めているのだ。

『相変わらず人を待たせるが好きなようですね』

匿秘回線から聞こえてくるのは凜とした声。お互い傍受の危険を考慮して映像回線は切つてある。

『世話をしたいなら使い魔とでもしてこう』

『連れない男になってしまったよつで』

「はあー、御託はいいから用事はなんだ?」

本当に、世話をしたいのなら使い魔とでもしていくくれ。こちらは任務の最中。

ロストロギアの護送を行つてしているのだ。

『あなたにやつてもらいたい仕事が一つ』

「却下だ。第一、いま任務中だ」

何度も言つが只今、ロストロギアの護衛中。他の任務など受けている暇はない。

『あなたなら問題ないでしょ』

「問題あ

」

『現在、密輸ルートで運ばれた第一級搜索指定ロストロギア・レック。これが山岳部を走るリニアレールで輸送されること。あなたには馴染みの深いものだから分かるでしょう』

「…………」

エリスは俺の話を聞くつもりは無いよつだ。

相変わらずなのはどっちだ。

グレイ・エリス

第二の暴君め。

「それで、レリックを押収すればいいのか？」

俺が出向くことが決定事項のようなので任務の内容を聞いておく。

『いえ。レリックを専門に扱っている部隊がいるようなので、基本的にそちらに任せたいと思います』

レッリクを専門に扱っている部隊。

聞いてことは…………あるな。

なんでも地上に新設された妙な部隊だとか。

「俺が出向く必要性が見当たらないな

なら、その部隊の連中にレッリクを任せればいいはずだ。
任務中の俺がやることではない。

『保険の為ですよ。彼女達が失敗した時は、あなたに回収を行つて
もう一つつもりです』

「機動課の部隊が失敗するようなことは滅多にないだらう」

『そうですね』

機動課とは本局のエキスパートが集まる部隊。

そのエリートさん達がたかがレリック一つの押収に失敗するとは
思えない。

失敗するとしたらレリックが爆発するぐらいしか思いつかない。

待てよ。

エリスは尻拭いをしろと言つていたな。

爆発したレリックをどうしろって言つんだ。

高エネルギー結晶体の再構築なんてどこの魔導師を探しても無理
だぞ。

「まさか、レリックを創れとか言つなよ」

『言つわけないでしょ。わたしをなんだと思つてゐるのですか?』

だとすれば、失敗の要因はなんだ。

△差し出がましいことを言つようですが、エリスはガジェットドローンを危険視しているのではないでしょうか?』

『流石、鋭いですね』

ガジェットドローン。

ここ数年で活動を活発化させているロストロギア回収用の機械兵。この機械兵は小型の質量兵器に加え、アンチ・マギリンク・フィールドなどという小生意気な武装を持っているのだ。
確か製作者は。

「ジェイル・スカリエッティか」

『ご明察』

稀代の天才科学者ジェイル・スカリエッティ。

数多くの事件で広域指名手配されている次元犯罪者でもある。スカリエッティが出てくれるのなら、おそらくあいつらも来るか。

『でもダメでしょ。まだ公開されている情報でないのですから、簡単に口にしては

「了解だ」

スカリエッティがガジェットの製作者と突き止めたのはここ最近のこと。

故に知る者だけが知る極秘情報である。

「俺が出る理由が分かったが、他にやることはない。」

どうせ無理難題の一つや二つを押し付けてくれのは分かりきつていふ。

ならば、早めに聞いておいた方が気が楽だ。

『彼らの戦力把握をお願いします』

是非とも断りたい。

初見の相手に手合せもせずに力量を測れとはつきり言つてしまえば無理だ。

それにどちらも全戦力でことに当たるわけではないはずだ。

「どちらの戦力をどうやって測ればいい?」

『スカリエッティの方は全力投入は無さそうですから、機動六課の戦力把握をできるだけお願いします』

表面上、目標が二つから一つに変わったように見える。
しかしながら、その内情は変わったわけではない。
ガジェットの方は敵対した機動課から各部署に報告書が行き届くだろう。

新型が出てくれれば別問題だが。

『方法はあなたの』慧眼を頼りにしていますよ』

困ったな。

結局、俺任せである。

「期待に添えるか心配でならない」

『『謙遜を』

聞こえるのは微かな笑い声。

『それでは』健闘を祈ります』

エリスは仕事を押し付けると通信回線を切つたようだ。

「アイ、資料を」

「今直ぐに」

求めるのは機動課の資料。

確か……機動六課とか言つたな。

機動六課？

最近どこかでその名前を聞いたよくな……。

「八神の部隊か」

ウイングドーを切り替えていくと、映つたのは茶色髪をショートカットにした可愛らしい少女。

八神はやて一等陸佐。

若干19歳で一佐の地位まで上り詰め、所持するのは魔導師ランク総合SSに強固な固有戦力、謎の多い希少スキルだったか。

ハ神が一佐まで上り詰めているのが驚きだ。この前会つた時は確か三佐だったはずだぞ。

「部隊員の名簿は？」

「今直ぐに」

すぐさま新たなウイングドーを開くアイ。

少し待て。

俺はあることに気が付く。

「アイ、お前は準備が良過ぎないか？」

「主のデバイスとして当然です」

「そうか……」

納得できる理由ではないが納得するしかない。

つぐづくと思うが俺の相方は癖が多いが優秀な奴らだ。
それにも管管理局のセキュリティーはずさんである。

一介のデバイスが端末なしにアクセスして、苦なくして部隊の構成員……つまり個人情報を引き出せるのだからな。

「まあ、この情報は元々、私が持っていたものですが……」

「聞いてないぞ」

「アイの言っていることが本当ならば、評価を変えなくてはならぬい。」

「元を連れれば主に非があるのでですよ」

「俺が何をした?」

「私ははやて様からの御誘いを断る必要がなかつたと思つております」

「蒸し返すな」

八神から新部隊に来ないかと誘われたのは事実だ。
その時は顔も合わせずに返してしまつたが。
大隊の隊長補佐を引き抜こうと思う気がしなかつたからだ。
なんにせよ、全ては過ぎ去つたことだ。

蒸し返す必要はない。

{はやて様からこつでも

「アイ」

アイの発言を制止せらる。

これ以上の問答は不要であるから。

{申し訳あつまセ。おじがましこじを直つてしまつた}

別に謝られる事でもないのだが。

そう言つてしまつと、話を戻されるので止めておく。

{旦那、メールが来てるだ}

「アルクからか」

どうせあいつも使いに出されたのだろう。
ヒリスに。

その前にオウル、お前は寝ていろんじやなかつたのか。

{それで合流場所は? }

{無し。そのまま現場に向かうだとか}

「了解」

合流の機会が減るに越したことはないが。
その分、人目に付きにくくなるからな。

{「で、旦那はこの仕事を受けるのか？」}

「愚問だな」

いまさら断れるはずもない。

依頼者はあるヒリスからだからな。
それよりも。

「腹が減った。どこかに寄つていくぞ」

{「旦那、いつもお腹の虫を鳴らしてアピールするもんだろ？」}

{「主はそのような下賤なまねをしません」}

驕り立てる相方達とともに歩を進めるのだった。

↓ Side out ↓

* * * * *

グラナガンの首都道路を駆ける黒いスポーツカー。
はやてを聖王教会に送り届けたフェイトは地上本部へと向かって
いた。

{「サー、カミラ少将から通信です」}

「少将から？ 繫いで」

通信が入ってきたことを告げるバルティッシュ。

フェイトは今から会う予定の人物から、通信が入ったことを不思議に思う。

『お久しぶりね、フェイトさん』

モニターに映るのはヒヤシンスのよつた淡い青の長髪に碧眼の若い女性。

レジアス・ゲイツと並ぶ、地上の重鎮の一人である。

「お久しぶりです」

フェイトはおずおずと頭を下げる。

カミラは地上勤めとはいえ、長年管理局の法に携わってきた凄腕の執務官。

つまり、フェイトの先輩にあたる人物である。

『あんまりよそ見していると危ないわよ』

「カミラがっ……！」

自ら通信を入れておいて、運転中のフェイトに注意を促すカミラ。フェイトが文句を言おうとしたとき、一台の黄色いスポーツカーが無理やり追い越してきた。

明らかなスピード違反、明らかな危険運転である。

「待ちなさいっ！…！」

犯人を追つたために魔法で赤色灯を出現させようとするフロイト。

『追わなくとも大丈夫よ』

「見過ぎすわけにはいきません！」

『大丈夫』

フロイトの行動はカミラに言いとめられる。
しかしながら、フロイトの性格から言ってたとえ小さな犯罪であつたとしても見逃せるはずがない。

『ほらね』

カミラがフロイトを制止して数秒足らず。

黄色いスポーツカーはサイレンを鳴らしたバイクに捕まっていた。

『さてと、本題に入りましょうか？』

「は、はい……」

当然の如く、話を進めていくカミラに戸惑うフロイト。

カミラが落ち着いているのは密輸対策為、道路の各所に局員が配置されているのを知っているからだ。

これはカミラが配置したものであり、フロイトはこのことを知らないのだ。

『いまこちらに向かっているところよ？』

「カミラが呼んだんですよ」

なぜフェイトが地上本部に向かっているかといつとカミラが直々に呼んだからである。

呼ばれなければ、そのまま帰つてエリオ達と昼食が取れたであろう。

『まず、パーキングに車を止めて貰えないかしら?..』

「あ、はい」

カミラに言われた通りパーキングを探し始めるフェイト。止まつて言わないといけないとは、重大な用事でありそうだ。

『サー、指令室より通信です』

「ええつと……」

『いいわよ出でても

モニターに現れたのははやて不在の六課で指揮を執つているグリフィス・ロウラン。

眼鏡に内実ともに真面目と、絵に書いたような青少年である。

『いまお時間宜しいでしょ?』

「うん、カミラも良いですよね?」

話していた手前もありカミラに確認を取るフェイト。
だが、彼女は。

『あら、グリフィス君じゃない。お久しぶりね』

『これは、メイソン提督ではありませんか』

フェイエトを繋いだモニター同士で話し始める。

『カミラでいいわよ。それには地上にいるから提督ではなく少将ですよ』

『失礼しました。ですが、仕事中ですのでメイソン少将とお呼びします』

『そうね、わたしもロウラン准尉とお呼びしましょうか？』

『どちらでも構いませんが……』

『じゃあ、グリフィス君で決定ね』

お互いの呼び名が決まり、二人は改めてフェイトに向き直す。フェイトはちょうどパーキングに着き、それまで運転に集中できたのは僥倖か。

「それで用事は何かな？」

『部隊長は無事にお着きなりましたか?』

「アーティストが何をやるか」の回にこじてこの題だと重複するから

フェイトがはやてを下してからもうずいぶん経つている。
聖王教会の本部が徒歩でないと、いけれない場所にあるとはいえ

流石につっこむ頃である。

『はやてさんとこいつ、あのヘアピンをした八神一佐かしら。』

『はい、間違ないと思います』

間違えなのは確かなのだが、ヘアピンで覚えられる、はやても
はやてである。

『わづ…………』

その事実を確認したカミツは憂鬱な表情を見せる。

「どうしたの、カミツ。」

『Iの前、うちのレオが遣らかしたらしこのよ』

「「えつ…………？」」

カミツの言葉を聞いてフェイト達は固まる。
レオとはカミツの弟であり、一部で有名な同調でもある。
その素性があまり分かつていない為、色々噂が立っている人物で
もある。

(はやてはレオ君と会つてたんだ……)

そして、一時的にはいえフェイトと面識のあつた人物だ。

『フェイトさんもグリフィス君も、今度レオを謝らせに行くことを
伝えてくれるかしら』

「分かりました、さつちつと伝えておきます」

カミラのお願いに、はきはきと答えるフロイト。
そこからは強い意志を感じ取れる。

『ありがとうね』

「謝りにきたレオ君を少しお借りしてもいいかな?」

『いじ田に』

微笑みあうフロイトとカミラ。

この時、グリフィスが一度も会ったことのないレオの身を案じた
のは必然のことだったのだ。

『あつと、大事なことを伝えるのを忘れていたわ』

カミラは肩を竦める。

『聖王教会の調査部が追っていたレリックが見つかったそよ

「か、カミラ、もう一回行つてもらえない?」

フロイトは信じられないものを見るかのように目を瞬かせる。
本来、先立つて六課に回されるはずの情報をカミラは平然と明か
したのだ。

驚くのも無理はない。

『もう一度言つわよ。聖王教会が追っていたレリックが見つかつた

から出撃に備えて

』

鳴り響く機械音。

フェイトの目の前のウインドーには赤く第一警戒態勢を知らせる文字が輝く。

「グリフィス君！――

『はいっ！――』

『先に伝えるつもりだったのだけど、少し遅かったのかしら。フェイトさんもグリフィス君もしつかりね』

緊張の奔る六課のメンバーを後日に、カミラは机の上に置かれたティーカップを口につけるのだった。

第三話 管理局の幽靈（前編）（後書き）

新キャラ、カミラ・メイソン

ファミリーネームから分かる様にレオの姉に当たります。姉弟で管理局員の彼らメイソン一族。一族は古くから管理局で働いてきた設定です。

さて、新キャラ繋がりで言いますが第三話が終わった後、もう三人増える予定です（涙）。

序盤からキャラを増やすのは愚の骨頂ですが、どうかお許しを。

レオ「やつと俺の出番が回ってきたか」

オウル「主人公なのに第一話までは出番なしだったもんな」

アイ「主の凛々しい姿が描かれてないですか！　これはどういったことなのか説明して頂きたいですね、ダメ作者……」

レオ「凛々しいなどと持ち上げて貰つては困るのだが……」

オウル「名前負けだもんな、主は」

アイ「お黙りなさいオウル……」

オウル「うげつ、やぶ蛇だったか」

アイ「お待ちなさいオウル」

オウル「追いつかれるものなら追いついてみる」

作者「（お）一人ともレオさんの手元で光るだけでは何も起きませんよ。」

レオ「はあ～、で、作者。俺の姿を描かないのには理由があるのだろ？？」

作者「はい。幽靈なら幽靈らしくなかなか姿を現さないほうがよいと」

レオ「なるほどな……だが、読者の皆様は想像しきくないだろうか？」

作者「その辺はもう少しの辛抱をお願いします」

レオ「それは俺にではないだろ？」「ほり」

作者「読者の皆様、レオさんの容姿についてはもうじまじらへの我慢をよろしくお願ひします」

レオ「ダメな作者だが、見放さなこでやつてほしい」

アイ「今日とこいつは引導を」

オウル「ふん、お前が俺に引導を渡すなど年早いわ……」

レオ「締まらない……」

作者「そうですね……」

第三話 管理職の書類（中編一）（前書き）

執筆速度が上がりません　＝（――）＝

軽いスランプに陥っています。

第三話 管理局の幽靈（中編1）

「Side レオ」

剥き出し山肌、辺り一面に生い茂る緑。
さながら、二者を隔てるようにひかれた鉄の道。
線路の上を縦長い機械、ガジェットに取り付かれた12両編成の
レニアレールが、徐々に加速しながら駆けていく。

（外周に18、内部に侵入したのが23機か……）

外壁を壊して内部に侵入していくガジェットビデオ。
その様子を俺達は上空から見守り続けていた。
かれこれ観測を始めてから十分は経つ。

観測を続ける俺の格好は、羽織るロングコートから手先足先まで
黒で統一されている。

肩口まで伸びた色素の抜けたような白金の髪と対照色でもあり人
目を引くことは間違えないだろう。

本来、夜間や建造物の内部で身に着けるようにしているバリアジ
ャケットであるから仕方がないが。

「はあ～」

「ため息をつくと幸せが逃げるぜ」

狙撃銃へとセットアップを完了し、俺の両手を塞いでいるオウル。
普段から軽口しか言わないこいつに注意をされてしまった。

「いま失礼な」と考えてたろーー。」

「何のことだ？」

俺はオウルのつゝこみに目を逸らした。
可能性は薄いが、今から起るかもしれない事態にも目を逸らしたいところだ。

「顔色が悪いようですが……辞退なされた方が宜しいのではありますか？」

「いや、大丈夫だ」

俺を心配するのは右手の裾に見え隠れする待機状態のアームドデバイス。

ミーチュアの剣形状であるアイはこざとこづ時に抜けるよう、常に手の届く範囲に備え付けている。

性格はどこかの不出来なデバイスと違つて、眞面目なお利口さんだ。

「一度受けた任務を途中で投げ出すわけにもいかないしな

一度受けた任務を放棄するなど言語道断だ。
失敗するにしろ、撤退するにしろ、何かしらの情報は持ち帰らないとならない。

これが俺の矜持の一つだつたりする。
故に曲げるわけにはいかない。

「ん？ あの金色の魔力光は…… フロイト嬢ちゃんじゃないか？」

「フー？」

背中を走る悪寒。
身体中が怖氣立つような感覺。
嫌な汗が体を濡らしていく。

（落ち着け…… 見つかるはずはない…）

落ち着け、落ち着け 。
何のために不可視の結界を張っている。
俺の編んだ魔法に綻びなどないはずだ。
このステルスフィールドの中にいれば見つからないはずだ。
自信を持って自信を。

己を鼓舞し、言い聞かせ、何とか立ち直る。

（まずは天敵の探索からだ）

神経を研ぎ澄まし辺りを探っていく。
だが、天敵の姿を捉えることができない。
五感で感じ取れるのは制御を奪われた鉄の箱と制御を奪っている
機械兵だけ。

ガジェットに気取らせない為に、とサーチャーすら配置していく
かつたのが仇となつたか。
悔やんでも事態は良くならない。

（見つからないのならこいつらも隠れるのみ）

思い立つたら吉日。

ステルスフィールドを張つてゐるからと言つて、いつまでも見つかりやすい上空にいてはいけない。
遮蔽物の多い地上に逃げ込むべきだ。

「オウル、ステルスフィールドを俺の周りに限定固定。それから、ステルスハイドも使用。一重掛けで隠れ」

「ふつぶははははは

「何を笑つてゐる。早く仕事を

「主、現実に戻つてきてください」

「俺は現実を見ていゐぞ」

アイが可笑しなことを言つ。

俺はきちんと現実を見てゐる。

現実からかけ離れたことなど考へていな

あの“心優しくない金色の閃光”が來るのだ。

感知力の強いオウルが魔力光を確認したから間違えない。

万が一見つかりでもしたら、どんな悲惨な目に遭うか想像に難くない。

それなのにアイと来たら……遂にガタが來たか。

オウルのAIが元から壊れでいるのは知つてゐたが、まさかアイにまで感染するとはな。

帰つたらアルクが持つてゐるであろうソフイーも含めて、全機フ

ルメンテナンス決定だ。

最悪、人工知能の初期化も考えないといけないか。

「フヨイト様はまだ到着しておりません。オウルの戯言に惑わされ
ないで下さい」

「な、にっ…？」

アイに驚嘆の事実を告げられる。
それにオウルの戯言だと……。

「オウル……お前という奴は！」

お前のマイスターである俺を謀るとほ、相変わらずいい度胸をして
いる。

覚悟はできているのだろうな。

「待った！ 待った！！ マジで悪かったから、許してくれ…！」

「許されると思つてゐるのか？」

謝った程度で許されるわけがない。
特にこいつの場合には。

「旦那、悪い冗談は止めて…」

「この怒りがまがい物だとお前は思つのだな？」

面白いことを言つたオウル。

この血が煮えたぎるよつた感覚が偽物であると？

笑わせるな。

{「じょ、[冗談は止せ]」
}

{「主」}

「止めるな、アイ。俺は今からこのならず者を破らなければならぬのだ」

俺はアイの制止を振り切るつとする。

すぐにでも、ここつをスクラッシュしなければこの感情は収まりそうもないのだ。

「今は任務中です。支障をきたす」とは御止め下せること

「どうしても止めないと嘆つかのか？」

{「無論です。どうか心を御静め下せること

「む……」

俺はしぶしぶ拳を下すこととした。

アイが言つてこることは極めて正論である。

オウルがいれば、任務の成功率も上がるに違ひない。これが、この利點を捨てることはないのだ。

{「助かったぜ、アイ」}

{「あなたの為ではありません。全ては主の為です」}

安堵の声を漏らすオウル。

だが、安心するのはまだ早いぞ。

お前の解体はすでに決定事項だからな。

{「そろそろ仕事に戻りませんか、主？」}

「ああ

遣らなければならぬことの順序は分かつてゐる。
まずは、この仕事を終わらす。

その為に俺はオウルをリニアレールに向けて構える。

「^めスクリーンを寄越せ」

{「了解。狙撃でもするのか？」}

左耳に装着したインカム。

そこから左耳を覆うように緑色をした半透明の膜が展開される。
オウルが軽口をたたきながらも、集めていた情報が映し出される。

「サー・チャーーも出すぞ」

{「出やしないんじゃなかつたのか？」}

「気が変わった、不可視の状態で情報収集に当たらせる。くれぐれ
もガジェットどもに気取らせるなよ」

今ままでは情報が少なすぎる。

目視での観測だけだった為ガジェットの正確な数すら割れてない
のだ。

〔本音ではフロイト嬢ちゃんが怖いんだがつ〕

オウルはなぜか俺の本音を読み取る。

帰つたら絶対解体する。

8年来の付き合いもここまでか。

〔にしてもよ田那、絶対その恰好じゃばれるぜ〕

〔私もオウルの意見に賛成します〕

分かつていてることを言つたオウル。
それからアイも賛同しないでくれ。

俺が身に着けているバリアジャケット。

これはフロイトと出会つた時と、背丈にこそ違えど全く同じデザイン
ンのままなのだ。

見つかつた時は一目で正体がばれるだらつ。

（こんなことなら新しいバリアジャケットを作つておけば良かつた
な）

いま展開しているバリアジャケット以外にも、すぐにでも展開で
きるのが一種類、開発中であるのがもう一種類ある。

だが、すぐに展開できる方は主に昼間、公の場で身に着けるよう
になつたバリアジャケットだ。

これを着て見つかれば部隊長に、他の任務を食つていたのがばれ
ることだろう。

フロイトに見つかると同等に避けたい事態だ。

「まあ、考えても仕方ないか……」

俺はマウント越しの光景に田を細めてこぐ。

「任務に集中するわ」

「へー解だ、旦那（です、主）」

いま遣るべきことはただ一つ。
与えられた役目を完遂するのみだ。

（Side out）

* * * *

（Side in）

それは最後に見た故郷の記憶。

“じやが、強すぎる力は災いと争いしか生まぬ”

“お前をこれ以上、この里に置く訳にはいかんのじや”

心の奥底に刻まれた言葉。

竜召喚は危険な力

私の手に宿るのは……

人を傷つける怖い力

血に染まる手を前にして、世界は暗転した。

（Side out）

* * * *

一つの月が浮かぶ、澄み渡った空。
蒼穹を金の閃光が駆けていく。

「グリフィス、こつちは一足先に現場に着く」

『到着次第、制空権の確保をお願いします』

少将の要請でパーキングに到着していたフェイトは誰よりも早く
事件現場である山岳地帯に到着していた。

そして、空には百にも下らない航空型のガジェット？型。
これから到着するであろう、新人たちを乗せたヘリが無事に辿り
着けるようにする為、フェイトは制空権を確保しなければならなか

つ
た。

「往くよ、バルディッシュ」

Y
e
s

S
i
r

フェイントは二機編隊で飛行中のガジェット？型に近づいていく。ガジェット達は接近してくるフェイントを察知し、旋回。迎撃態勢を整える。

H a k e n
From

ガジェットの攻撃を避け、間を詰めるフェイト。手に構える戦斧型のバルティツシユは鎌へと形を変える。

「はああああああああ！」

フロイトは掛け声とともに鎌を振るう。

飛翔する刃がガジェット一機を真つ一つに切り裂く。

放された魔法はまだ止まらない！

そして残り一機も、先の一機同様に切り裂かれ爆碎する。

次つ！！

フリートは次の目標に飛翔していく。

空を切る青い熱線。

ガジェットも必死に迎撃を行うが、高速移動を行うフェイトに掠

る」ことも叶わない。

{ H a k e n S l a s h }

踊るが如く、空を舞うフュイト。

ガジェットはまた一機、また一機と鎌を振るわれる度、切り裂かれしていく。

『グリフィス君、わたしも出るよ』

無線から響くなのはの声。

フュイトが目を凝らしてみると、まだ遠いけれども六課のヘリが近づいてきていた。

『大変です！ ヘリ下方より敵影補足！－！』

森の中から姿を現すガジェット？型。

五機編隊の一編隊がヘリに向け飛び立つ。

「ヴァイス！」

『分かつていますよ！－！』

余裕のない声が響く。

ヘリはガジェットから逃れる為に速度を上げていく。

六課のヘリは最低限の武装を持つていてガジェットに抗えるほどものではない。

「バルディッシュ！」

{回避を。上空から攻撃です}

「ぐつー。」

身を翻すフェイト。

へりに近づこうにもガジェットが行く手を塞ぎに掛かる。

「邪魔だあ！」

鎌を薙ぐフェイト。

迫っていたガジェットを切り伏せる。

「急ぐよバルディッシュ」

「ですが……」

危機を募らせるフェイト。

だが、フェイトを囮む敵の数が多い。

おそらく、彼女は無理をして突破をするつもりなのだろう。

「プラスマランサー、セット。ファイバー」

十一発の魔力弾で弾幕を張るフェイト。

環状魔法陣に撃ち出された鋭い魔力弾は急激な加速を伴い敵に向かっていく。

「Defenser」

背後から迫る攻撃をバルディッシュがバリアを張り受け止める。
その間にフェイトは前方の四機を貫いた魔力弾を操る。

「ターン」

環状の魔方陣が魔力弾を覆う。

同時にその場で停止し、フェイドが再び照準を合わせることで魔力弾は逆方向へと、フェイドの背後に向かって撃ち出された。

軌道を大幅に変えた魔力弾。

フェイドの背後に迫っていたガジェット達は為す術無く、機体に風穴を開けられる。

「よしつ！ 行くよ」

十機程度落としたところで、フェイドの視界が開けてくる。数が急激に減った為にガジェット達の包囲網が大きく綻びが生じてきたのだ。
フェイドは自身が持つ、管理局最速とまで言われる魔法で突破を図る。

「ソニックム」

『……動くな』

重く突き刺すような呪い男の声。

念通でこの声が聞こえてくるまでは。

「何処にいる

「どうされましたか？」

「誰かいる

フロイトは油断なく構える。

まるで、後ろから銃口を突き付けられたような嫌な感覚を味わう彼女。

頬を伝つ汗を拭う」とも許されない。

『……そう固くなるな』

相変わらず念通を送り、姿を隠したままの男。だが、先程の刃物のように鋭い声とは異なり、声音も柔らかく、若干声質も高くなっている。

それでも低い男の声であるが。

『へりはいいのか?』

『……』

問い合わせにフロイトは無言で答える。

第一、へりに行けれなくなつたのは物騒な念通を入れてきた男せいなのだ。

『おでんば娘は掃除でもして、その間にへりはこちりでどうにかする』

「お、おでんばじやあつませんーー。」

〔サー……〕

顔を羞恥の色に染め、必死に否定するフロイト。

だが、鎌を振り回し暴れ回った後で、何を語りついと説得力はないわけだが……。

{Defender Plus}

「つ！」

フエイトの頭上で光が弾ける。
降りかかってきたのは撃ち抜かれたガジェットの残骸。
そして。

『頭上注意だ』

注意を促す声。

フエイトの頭に響く声は、どこか意地悪な雰囲気を感じさせる。

『安心して暴れている』

「後で話を聞かせてもらいますから」

『.....』

フエイトが一言放つた後、念通はぴしゃりと途絶えてしまった。

「破るよ、バルディッシュ！」

{Yes , ser }

いつになく荒い、主の言葉に戸惑いを見せるバルディッシュ。
そんな相棒を掲げて、陣形を取り戻しつつあるガジェットの包囲

網へとい、フロイトは鬱憤を溜め込み飛び込んだのであつた。

第三話 管理職の苦悶（中編一）（後編）

なんだか中途半端な終わり方になってしまった。
なので、早めに次話の投稿ができたらと考えております。
(スランプに陥っている『なんだか最近、寝ているのに寝不足ですか』の為現実的ではあつませんが……)

それと、第三話にして（中編一）等と何とも長くなつやうなタイトルを付けてしまってます。
この先どうなるのでしょうか？
かなり心配です。

第三話 管理職の面接（中編2）（前編）

やはり、一週間かかってしました……。

なのに書いた内容は時間軸から順序とあまり進んでいません。
小説を書くのはやはり難しいです。

さて、作者の独白せりじこりにして、今回せこままでと違う趣向
を凝らしてみました。

それでは、どうぞ。

第三話 管理局の幽霊（中編2）

「なのはさん！ チビジモ！ しつかり掴まつていろよ……」

「…………」「…………」「…………」「…………」

大きく揺れるヘリ。

点滅を繰り返し警告を告げる赤色灯。

少女達の悲鳴が木霊する。

「ヴァイス君！ もう、少し安全な運転はできないんですか？！」

「無理言わないでくださいよ……」「

[宙に浮かび、頬を膨らませるコイン曹操。]

それに涙目で答えるのは黒髪の青年。

六課のヘリパイロット、ヴァイス・グランセニック。

現在、彼は年若き少年少女の命を預かっていたのであった。

〔後方より熱源多数、回避運動を開始します〕

「わわわわわつとーー！」

「…………」「…………」「…………」「…………」

ディスプレーに警告が表示された後、機内は大きく左方向へと傾く。

「ヴァイス陸曹！…」

「俺のせいつですか……？」

「わたしからもお願ひ」

「なのはなまで……」

「申し訳あつません……」

遂にはなのはなまでお願いされ、ヴァイスは肩を落とす。

ヴァイスの相棒であるストームレイダーは非常に気まずがむづである。

〔再度、後方より熱源発生〕

「安全にだよー」「安全にーー」

「や～くつづですよー」

「分かつてますつてーーー！」

今度はへりはゆつたりと回避行動をとる。

そして 。

〔左脚部に被弾！ ですが、航行に問題はありません〕

激しい揺れがなのは達を襲う。

「何をやつてゐるですかつ！――

「仕方ねえだろ、うつ！」

いがみ合う二人。

その光景を見て
なのははため息を一ぐ

「ストームレイダー 被害状況は？」

→ 障壁を若干抜かれただけです。問題ありません

ストームレイダ
からの報告を受け、なのははモニターへと田を
移す。

ジエットが十機。

何故この状況に陥ったかを語るには、少し過去に遡る必要があつた。

＊
＊
＊
＊
＊

なのはトリイン、そしてフォワード新人の4人はヴァイスの操る
ヘリの機内で静かに揺られていた。

「みんな肩の力を抜いてね」

「肩の力を抜くです～」

「　　は、はい！　」

「……はい！」

緊張の面持ちで顔を上げる新人達。

訓練校を出たスバル、ティアナはともかく、実践が初めて歳もまだ幼いという他ないエリオ、何より力を扱うことに戸惑いのあるキャロはうつすらと汗をかき、緊張を隠せないでいる。

「キャロ、大丈夫。そんなに緊張しなくても」

キャロの様子に気付いたなのはが優しく声をかける。

「一人じゃないから、ピンチの時は助け合えるし、キャロの魔法はみんなを守つたあげられる、優しくて強い力なんだから」

なのははキャロの小顔をそっと手のひらで包み込む。

「ねえ」

優しく、子どもを諭すように言葉を掛けていく。

「……はい」

なのはの言葉を聞いたキャロの顔は僅かながらも血の氣を取り戻していた。

『アルト、ルキノ広域スキヤン！ サーチャー空へ！』

『ガジェット反応……空から！？』

『航空型、現地観測隊を捕捉』

事件現場に近づくにつれ、六課の管制室より慌ただしく報告が入る。

『ライトニング1、エンゲージ』

そして、なのはが見つめるモニターの向こうでは、金の魔力が進る。

先立つて現場に到着していたフェイトが制空権の確保に乗り出しているのだ。

「グリフィス君、わたしも出るよ」

『お願いします』

なのはは部隊長代理のグリフィスに出撃することを伝える。

「ヴァイス君、フェイト隊長と一緒に空を抑えるよ」

「うっす！ なのはさん、お願いしますよ」

ヴァイスが後部のメインハッチを開く為、ディスプレーに向かい直した時。

機内に異常事態を知らせる赤色灯が灯りと警告音が鳴り響く。

〔下方より熱源が接近中。機影1-0〕

「んなつー!?

「じりしたのー!?

「何があつたですかつー!?

操縦席に顔を出していたなのはほもぢり、飛んで来たリインも
ヴァイスに状況を尋ねる。

「やられました……待ち伏せです……」

答えるヴァイスは悔しそうに顔をしかめる。
新たに表示されたモニターからはガジヒットがヘリに飛来していく
様子が映し出されていた。

『ヴァイス!』

「分かつてしますよー!?

遠目でガジヒットの強襲を用の当たりにしていたフュイトからも
通信が入る。

「じうあるつもつですかつー!?

リインはヘリの操縦士に問う。
ヘリに積まれている武装では反撃することは叶わず、なのは達が
迎撃に出るには遅すぎる距離であるのだ。

「少し揺れるかもしないんで、ひゃんと掴まつてくださいよ

ヴァイスが選んだのは逃走。

ヘリはガジェットを振り切るべく速度を上げていった。

* * * * *

Side ヴァイス

「ヴァイス君！ 私が出るよーー。」

「ダメですーー！」

「でも……」

「無事に現場まで送り届けるのが俺の仕事なんですからーー。」

俺は今にも飛び出していきそつた、なのはさんを押し留める。

ヘリの構造上や安全面から言ひて、回避行動をとりながらハッチを開けるのは得策ではない。

ハッチ開けるとなれば自然に速度を落とし、機体も安定させなければならぬからだ。

その隙についてガジェットはより接近してくるだろう。

接近を許せば、ヘリを覆っている魔法障壁はAMFによって解かれ、瞬く間にハチの巣になることは目に見えている。

なのせれんに田いもりこたいのはヨ々なんすつナビね……

「騎士のスーパーHースが出れば、ヘリを追いつけるガジウム
トなど取るに足りないだろ!」

俺は何とかなのはさんを外に出す方法を考える。

のだが……。

(見つかんねえ……)

ヘリの操縦で手一杯といひともあり、なかなかいい案が浮かば
ない。

「ワイン畠長、なのはさん。なんかじへ、ぱつぱつヒガジヒツト
を片付けれないですかね?」

「ぱつぱつですか?」

「だから、私が出ぬよー。」

「それは却下で……」

なのはさん、それは最後までとつておきましょ!。

「ヘリの中から攻撃とかできないですかね?」

「うそー、それさちよつと……」

「できるナビ、撃墜できなことですよ~」

何とも消極的な答えが返つてくる。
無茶な要求だからしじょうがないのだが。

「あっ、でも……」

何かを思いつた様子のなのはさん。

出撃は無しつですよ。

「壁抜きの砲撃なら

「ダ、ダメですよ、それは……。」

「ぜ～たいダメです～！～！」

リイン畠長とともになのはさんの意見にダメ出しを入れる。

何を考えているんですか！

ガジェットの前にヘリが墜落しますって。

「いやだな～、二人とも。冗談だよ」

「やはははと笑うなのはさん。

〔冗談に聞こえなかつたんすけど……。〕

とにかく真面目に考えまじょ～。

俺が提案しようとした矢先

。

〔後部ハッチに被弾〕

再び強い衝撃がヘリを襲う。

「しつかりするです～！」

「操縦に専念して～！」

話にのめり込み過ぎて、手元が甘くなってしまっていた。

ちなみに操縦に専念できなくなつたのは半分あなたのせいですか
らね、なのはさん。

愚痴つても仕方ないのでしつかりと操舵管を握り直す。

後方ではいまだに砲撃でどうやら言つているエースがいるが気に
しない。

追いつかれるのも時間の問題か……

モニターに目をやると距離を大分詰められていた。
やはり、ヘリと小型航空機では機動力にかなりの差ができるしま
うのだ。

別のモニターではフェイドさんが一人、数十機のガジェット相手
に立ち回っていた。

ガジェットの攻勢も激しいようでなかなかこちらの救援に来られ
ないようだった。

(「はなのはさんに出てもらひしか」)

苦渋の決断。

一か八かの賭けになるが仕方がない。

「（おい、聞こえているか？ ヘリのパイロット）」

突然、念通が届く。

それは、聞いたこともない男の声だった。

「（ガジェットどもも撃墜してやるから、ヘリを安定軌道に移せ。10カウントだ、急げよ）」

「こや、ちゅうとー！」

「どうしたの？ ガアイス君？」

「どうしたですか？」

俺の声に訝しげな反応を示す、後ろの二人。
どうやら、念通は俺だけに届いているようだった。

「（10……9……8……）」

既に送られてくる念通でのカウントが始まっている。
いつも言葉が届いてないのはわかっているので当たり前と言つたら当たり前なのだが。

「しても、この強引さ。
どこかで……。

俺は記憶の中を探つていいく。

すると、思い当たる人物が一人。

試に昔見た姿を思い浮かべ、念通を送つてみる。

「（……もしかして……レオのだ……）」

「（黙れ。……5……4……）」

そこで答えたならダメですよ……。
正体丸分かりじゃないですか。

何の為に姿を隠し、声を変えてまで念通を送つてきているか分からぬいが、念通の相手がレオの日那でほぼ間違えなかつた。

「（3……2……）」

と、考え事をしている暇はなかつた。

あの人ならヘリゴと撃ちかねない。
遣ると言つたら、遣るのだ。

急いで俺はヘリを回避行動を止め、水平軌道に移していく。

「（1……0）」

カウント終了と同時に一発の白銀の弾丸が空を縦横無尽に駆け回る。

ヘリを追つていた十機のガジェットは為す術もなく、たつた一発の弾丸に次々と貫かれていった。

「相変わらず、半端ねえ……」

地上に落ちていぐガジュットの残骸を見て、俺は密かに呟いたの
だった。

～Side out～

* * * *

～Side out～

〔全機撃墜確認。お見事です〕

「ふう、まつたく手間を掛けさせてくれる」

「こうして当てる」となく目標のガジュットを落としたことで、一息
つく。

「やったな旦那、百発百中だぜ」

「いの場合、一発十中の方が正しくありませんか?」

「一発必中でいいと思つただが……」

先程の狙撃で使つたカートリッジの空薬莢を腰のポーチに入れて
いく。

ここにいた証拠を残すのもなんだし、一度使った薬莢は射撃訓練の時にも使えば経費削減になる。
もし、形が変形して使い物にならないようなら破棄すれば問題ない。

一つ注意を上げるなら、発射後の空薬莢は非常に熱いので回収には気を付ける必要があることぐらいか。

「時にオウル。お前に聞きたいことがある」

「何だい旦那？」

「狙撃の際、生成した魔力光の色を変えなかつたのは何故だ？」

俺は予めオウルに魔力の波長を変換する様に伝えていたはずだ。

「旦那、俺はちゃんと仕事をしていたぜ。魔力光も白っぽくなつていただろ」

「確かにな」

オウルの言う通り、発射した魔力弾の色は白銀へと変わっていた。
だが、俺が求めていたのは。

「違う色にはできなかつたのか？」

各種波形では、本来俺が持っているはずの魔力は観測されないとだろ？。

オウルの偽装によつて機械類は誤魔化せるはずだ。

しかし、それ以上に問題なのは人の田である。

白光の下で銀から白銀に変えた程度ではあまり意味をなさないだ
るつ。

誤認を誤認と捉えてくれないかもしれない危険性が出てくるから
だ。

「ほほほ、田那はフエイト嬢ちゃんとお揃いの金色がお望み
ざやあああ！？」 痛い痛い、マジ悪かつたから……』

遂、オウルを握る力を見誤つてしまつ。

「それで他色に変換する氣はあるのか？」

「赤でも、青でも、黄色でも、虹色でも何でもやりますよ」

オウルがやけつぱひに施案を始める。

色は何色でもいいそうだ。

「なら、透明とこつのは」

「お皿葉を返すようですが、それは如何なものかと」

珍しくアイが意見を挟んでくる。

何か思つところがあるのだらう。

「ではアイ、何色がいいだらうか？」

「私は黒か紺色をお勧めします。余り魔力変換にばかり労を費やし
ても仕方ありませんので」

「うむ……」

アイが言つことは一理ある。

所詮、魔力光を変えるのは偽装の為である。
そこに必要以上の労力を費やしても仕方がないな。

唯でさえ、魔力の波長を変えれば効率がガタ落ちしてしまうのだから。

「良し、分かった。アイの案を採用する」

「で、黒か紺かどっちなんだよ」

「紺色で頼む、できるか?」

「あつたぼつよ……」

黒に偽装してしまつとアルクの魔力光と重なるからな。
問題ないのだけれども。

ひちらの方針が決まつたところで、現場に目を戻す。

空には新たに桃色の砲撃を放つ少女が加わり、あのおてんぱ娘とともにガジェットを殲滅している。

瞬く間に数が減つていくのは圧巻だ。
数は少ないが撤退しようとするガジェットも現れるくらいに。

そして、助けたヘリからは4人の少年少女と一匹の竜がリニアールに向けて飛び降りていた。

「大丈夫だろうか？」

「心配ないと思われますが……」

仮にも機動課に配属されるような魔導師だから問題ないと思つたが、少し心配になる。

リニアレールの速度は60キロ。

少女達は陸戦魔導師のはずだったから落ちれば命の保証はない。今まで気付かなかつたが、リニアレールの速度が落ちているな。アルクが要らぬ手出しをしたのだろう。

「アルクもお節介だな」

「主も人のことを言えませんけどね」

「旦那もアルクもお節介病だからな」

「……何か言つたか？」

アイとオウルに何か言われたが聞き取れなかつた。いかんな、集中力が散漫している。

「」は「」に喝を入れないと……。

「ふんー。」

「ふぎやあーーー。」

「あ、主!?」

頭に走る鋭い刺激。

それにひられて思考が鮮明になつていく。

「さ、氣でも狂つたか?」

「悪いな、少し氣合を入れたかったんだ」

「そんなことに俺を使うなよ……」

謝つたのだから許せ。

「あの子達は無事着地したようですよ」

気合を入れ直している間に、少女達は無事着地に成功したようだ。

先頭車両に降り立つたのはオレンジの髪の少女と青い髪の少女。
……見なかつたことじょひ。

遅れて最終車両に降り立つたのは赤い髪の少年とピンクの髪の少女、それから小さな白い飛龍。

歳はどちらも十歳。

ディスプレイに表示される情報を確認していく。

「若いな」

「少年は騎士見習いの様ですから普通ではありませんか?」

「 そもそもなこと。現場に出でるには早すぎるのだ」

古代ベルカに置いては十歳で騎士の称号を授かっていたようだが、現代はそのようなことはない。

そもそも、心を技を身体を鍛え始める時期が違うのだ。
故に今と昔を平等に扱うべきではない。

なのに未熟な子どもを前線に出すとは何を考えているんだ、ハ神
は。

軽い憤りを覚えてしまつ。

だが、現場にいなき者ることを考えても埒が明かない。
いざという時にサポートに入らないとならないな、全く。

そしてもう一人の竜を連れた少女は。

「 召喚士か」

こちらも同じ十歳だが、召喚士は扱う召喚獣と才能によるところ
が大きいので一概なことは言えれない。

それでもやはり……幼い。

遠目から見る限りでは、少女から戦う意思が感じ取れない。
おそらく、能力に精神がついてこれでないのだろう。
才能によって左右される召喚士ではよくあることだ。

となると、こちらもフォローが必要か。

無駄な仕事が増えているような気がするが気にするまい。

「 主、そろそろ移動を」

「ああ

一度も同じ場所に留まつて、狙撃を行つたからな。この場所を割り出されるのも時間の問題だうつ。俺は重い腰を上げる。

「オウル」

「人を良いつに使っておいて、旦那は良いじ身分ですな」

急にオウルがへそを曲げ始める。

乱暴に扱つたことを根に持つてこむつだ。

「解体は止めてやるから機嫌を直せ」

「げつ！ 本当にやる気だったのかよ」

「もちろんそのつもりだった」

「しゃあないな、その代わり解体は無しだぞ」

残念だ、デバイスの機嫌を取る為に任務後の予定が一つ潰れるとは。

{Stealth Hide/Silent Move}

紺色の光を放つミッド式の魔方陣が足元に展開。不可視の魔法が俺を包み込んでいく。

「しっかり見届けさせてもらひつよ

俺の本来の任務。

彼らを見守る為に、再び空へと姿を消すのであった。

{} Side out {}

第三話 管理局の幽靈（中編2）（後編）

レオ「で、どこが変わったんだ？ 説明してもらいたい」

作者「前回までセリフ一行に對して地の文三行だったのを思い切って変えてみました」

レオ「ふむ。確かに……」

作者「後はセリフの増強ですかね」

レオ「後半は変わっていないよ」と思えるが？」

作者「キャラの視点に入るけどしても地の文が多くなってしまうことが悩みですね」

レオ「なるほどな」

作者「そのほかにも原作キャラの視点も結構難しいですね」

レオ「それだと俺の視点が簡単だと言っているよ」と聞こえるが？」

作者「オリキャラですから」

レオ「オリキャラだ、と言つて逃げたな。お前」

作者「原作キャラだとイメージを壊さないよとするのがなかなか難しいもので」

レオ「最終的にはどうせ壊れるんだろうけどな」

作者「ぐつー」

レオ「まあ、追及はまた今度にするとして、そろそろ時間だ」

作者「あれ……掲載予定口過ぎてこますね（汗汗）」

レオ「きつひり一時間な」

作者「あっ、一時間一分になりました……」

レオ「こんないい加減な作者が書く物語だが、次回もよろしく頼む」

作者「ご意見、ご感想待っています」

第三話 管理画の幽霊（中編3）（前編）

皆さんお久しぶりです。

三週間ぶりの投稿となります。

まずは一週間も更新をサボってしまったすこませんでした m(

—) m

不甲斐ない作者をお許しください。

内容が決まっているのに筆が進みませんでした。

作者「血の非力をを感じるばかりです」

作者「！？ って、何でセリフに！？」

某海洋生物が迫つてくるようなBGM。

作者「ひいいい！」

作者「見つけたよ

作者「あなたは……」

「……なんで一週間も投稿サボったのかな？ 正直に言つと弁解の余地はあります」

作者「それは……」「よくよくよくよくよく」

「ダメだよ、そんな理由で手を抜いたら。取り敢えず、〇

H A N A S H I だね

作者「いやあああああああああつーーー！」

後書き ひづく。

第三話 管理局の幽靈（中編3）

「Side アルク」

僕達は現在、暴走列車の7両目。

保護対象のある重要貨物室に単身潜入しているのですが……。

「暇ー」

「そうだね」

然るお方から依頼のあつた保護対象の捜索、封印。また、一部の車内カメラの停止など偽造工作も終えて手を持て余しているのです。

「アル君しりとりでもしようつかー」

「それはもうやったでしょ……ってか、アル君って呼ぶの禁止ー！」

「ふふ。アル君の意地悪ー」

プレスッレト状態のソフィーがぶつ垂れる。

アル君の語源は言わずと知れるもの。

名前のアルクと接尾語の君をを合わせてアル君。僕としてはちゃんとアルク君と呼んでほしいところです。

「しつつの“り”からね、リング」

「グローブ、つてなにじつとつ始めるのー。」

「暇だからに決まってるじゃない。ブルドッグ」

「暇なら他のことをしようよ、例えばモニターで外の様子を見たり
れ」

外では激しい戦闘が繰り広げられていることでしょう。
幾ら車内で保護対象の護衛を任せているからと言つても、外の
様子は気になるところです。

「アル君こまさら何言つてるの？ 外の観測はずーと前からやつて
いるよ~」

ソフィーは呆れたような声で言い返すと、次々モニターを映し出
していきます。

「いつの間にサーチャー出したの？」

「そんなの潜入するときには決まっているじゃない。ほら、早く“ぐ
”だよ“ぐ”」

あれ、僕はそんな指示出した覚えないよ。
有つて迷惑になる物じゃないんですけど……。

「グレープ、ソフィー助かるんだけど、せめて一声かけてね

「面倒くさいからやだー、アル君が見落としていることのツォローを
報告していたら切がないよ。プレート」

「トレーデ、面倒くさいからって……僕が不甲斐ないのも分かるけど最低限の報告は頼むよ」

自分のデバイスが行っていることぐらい知つておくべきです。ソフィーの不手際があつた時に、後始末に奔走するのは僕の役目なのですから。

「レオが狙撃をしたこととか言つた方がよかつた？ ドブ」

「はあ！？」

「アル君、声が大きい」

「う」「めん」

驚きのあまり大声を出してしまつ僕。

全く何をやつてゐるですか、あの人は！
また、要らない仕事を増やして。

怒り心頭に発するとは当にこのことでしょう。

「アル君、落ち着け。『ぶ』だよ、『ぶ』」

「分かったよソフィー、落ち着くよ。でも、しづとりはもつ止めにしないかい？」

「ダメ、アル君がソフィーに勝つまで終わらないのです～」

「それって一生じゃないの？」

未だ僕はしりとりにおいてソフイーに勝利を収めたことはありません。
せん。

当然至極。

普通に考えてそれは仕方がないことです。

人間と機械、この差は歴然。

記憶量に置いて人がA.I.に敵うはずもなく、処理速度もまた然り。
唯一残された点は柔軟性で勝つことなのですが、それも初めてソフイーとしりとりを遣つた時に看破されてしまったのです。
このデバイスはどれだけ優れているのでしょうか……。
つづづくこんな遊びを教えるんじゃなかつたつと後悔する次第です。

「ふつふつふつふ、アル君は一生ソフイーには敵わないのです。
さあ、負け犬よ、そこにひれ伏しなさい」

「いや、止めておくよ」

きっぱり断つておきます。

何故、しりとり如きでそんな無様な真似をしないといけないのか
理解し難い。

何よりソフイーの前にひれ伏すなど無理難題。
物理的に不可能です。

この無駄に高性能なデバイスは僕の腕に巻き付いており、仮にひれ伏したとしてもソフイーの前にひれ伏すのではなく、ソフイーの上にひれ伏すことになります。

はつきり言っておかしいでしょ。う。

理解不能な状況が造りだされるのです。

まあ、ソフイーを一度外して僕の田の前に置けばできないうともないのではあります……。

「アル君には拒否権ないんだよ～」

「なら、拒絶権発動」

「…………なにそれ？」

「拒否権の上位権限

「…………」

視線が痛い。

当然デバイスだから田なんて付いてないはずなのですからども、妙に痛々しい視線を感じます。

「どうしてこんな子に育つちやつたかな?」

「僕は君に育てられた覚えはないのだけど……」

「また、反抗的な態度を取つて……！」

事実を述べた途端、機嫌を損ねるソフイー。
困ったものです。

「ふんっ！ そんな態度ばっかり取つてると、『あれ』をばら撒

いちやうんだからーーー}

「ちよ、ちよっと待つてよ！？ 僕が悪かったから、それだけは勘弁してーーー」

“あれ”とはソフジー曰く、【アル君の私生活日記】。

タイトルを聞くだけでも呆れてしまつのに、中身を見たときには正直声が出てきませんでした。

あれは私生活日記ではなく、僕のことに関する暴露本のようなものだったのです。

個人ステータスはもちろん、普段の生活から知られたくないような過去の失敗談に気になる異性、挙句の果てには口外してはならないような内容まで……。

暇だからと言つてこのようなものを文体に纏めるのは止めてほしい。

その時以来の切実な願いだつたりします。

そんなものが出来れば大惨事なのですが、こちらに留める術はありません。

ソフジーならネットワークを通じて一瞬の内に情報を拡散させることぐらい容易なことなのです。

つまり、僕の運命はこの憎たらしいデバイスの掌の上。主導権はあちらに握られているです。

△アル君が泣いて頼むなら止めてあげてもいいけど？

「お願いしますーーー できれば、一度と口の田を見なによつてお願いしますーーー」

もはや、プライドもあつたものではありません。

僕は【アル君の私生活日記】の封印を頼み込みます。元々あるのはちっぽけなプライドですけれど……。

{まあ、しょうがないか}。でも、こればかりだと保管しておくな

「うう……」

思わず呻いてしまいます。

相手に弱みを握られたままなんて生きた心地がしません。

{じゃあ、じつとつの続きをしよう}。

「分かったよ……」

何故しつゝりなのか……。

理由は明白。

相手をじわじわ追い詰めていく、詰まる所相手がもがき苦しむ姿を見るのが好きみたいです。

このデバイスは。

{どうにかしてこの性格が直りませんかね。
今度、製作^{レオ}者に相談でもしてみましょ}うか

{さあ、アル君“ふ”からだよー}

「ブドウ」

{ぶつぶつ}！アル君の負けー！わざと自分でグレープって出したよね？

「違う、葡萄じゃなくて武道だよ」

「むう～、紛らわしいな～」

またもや不機嫌そうな声を出すソフィー。

常に勝っているんだからこれぐらい認めてくれても……。

はっ！ しまったー！

つまらない意地を張つたばかりにじつとりが長引いてしまいました。

不覚です。

「ウイニング。言い忘れたけど、アル君には十秒ルール追加だからね」

「へえっー？」

「長時間の中斷にさつきの件が加わったから当然だよ」

「へー！」

理不尽としか言いつのない仕打ち。

最初の内は少しきつこ位でしょうけど、後半になつてみると鬼のよつな効果を發揮するはず……。

やはり、このヒーはエグイことをしてきます。

「それと……」

「…………？」

間を置かんとばかりの意味深なソフィーの言葉に僕は息を呑む。
まさか、これ以上ハンデを増やすとか言わないでしちゃうね。

「もしも、アル君が勝つようなことがあつたら【 アル君の私生活
日記 】を消したあげる』

「つー?」

甘い誘惑。

その言葉を聞いた瞬間、僕の身体に衝撃が奔った。

「いいでしょ! 一 遺りましょ! 一 ソフィー負けてから前言撤回
はなしだよー! ！」

{ } , }

湧き上がる闘志。
燃え上がる熱意。

いま此処に、負けられない戦いが幕を開けるのでした。

~Side out~

* * * * *

「たあああああ———」

掛け声とともに勢いよく鉄の地面を疾駆する少女。

スバル・ナガシマは柔軟な四肢を用いて、リニアレールに侵入したガジェット達を次々と力技でねじ伏せていく。

「リボルバー・シユウウーネート…！」

薬莢排出の後に右手のリボルバーナックルから放たれる衝撃波。それはガジェットの持つAMFを易々と貫き、ガジェットに命中する。

衝撃波を受けたガジェットは機体に大穴を開けて、静かに沈黙するのであった。

「ふう〜、これで終わりかな？」

〔現車両に敵影なし。お見事です〕

この車両を鎮圧して一息つくスバル。

それに答えるのは相棒のマッハキャリバー。

スバルの履くローラーシューズの中央にある宝石型のコアがきらりと反応する。

マッハキャリバーの言つ通り、スバルはここまで華麗な快進撃を続けている。

壁をぶち壊したり、天井を突き破つたりっと少々過激ではあったが。

何はともあれ、少女は五両田までの制圧を完了したのである。

「（ティア五両田まで制圧終わったよ）」

「(…………)」

「あれ?」

スバルはツーマンセルを組む相方のティアナ・ランスターに連絡を入れる。

だが、返ってきたのは無音。

何やら念通の向こうで空気が震えているのは気のせいだらうか。

「(ティアナ)」

そのことにも気づかずスバルは呑気に相方の名前を呼ぶ。

「(こ) か バル(」)

「(ティアナ?)」

「(こ)のお、馬鹿スバルっ!…!…(」)

「 つ つ つ つ つ !?」

スバルの頭に響くティアナの罵声。その音量にスバルは頭を押さえる。

「(勝手に先々行って! ちよつとは後のことも考えなさい!…)

「

ティアナが怒るのも仕方がないことである。

一画面に降り立った彼女たちを待っていたのはガジェットの歓迎。

リニアレールの中から天井を突き破つての攻撃であった。

それに対して、スバルは単身でリニアレール内に突入。ティアナと現場の指揮管制を取るリインは外に湧き出てきたガジエットの対応と現場把握を行う。

事が出来たのは最初だけであった。

一両目のがジェットを数機撃破したスバルは勢い余つて天井を破壊。

そのまま、外に放り出されてしまう。

マツハキャリバーの機転によりスバルはウイングロードに乗り、列車上へと無事帰還。

だが、着地したのは三両目。

線路の上を走るリニアレールと真逆に進行するスバルは後方へと流されてしまっていたのだ。

さらに運が悪いことに例の如く、三両目に降り立ったスバルを待つていたのはガジェットの歓迎。

スバルはそのまま戦闘に突入。

何も考えず戦闘を続けていたスバルは流れに乗るに乗つて五両目まで来てしまったのだ。

当然、一両目の残党狩りと二両目の制圧を行つたのはティアナになる訳で……。

「（あんたはいつもそうなのよ！ 我を無理矢理でも押し通すし、指示がなかつたら我武者羅に猪突猛進を繰り返すし！ ああ、もううー！ 指示がなくても、少しは考えて動きなさいってのーー）」

「（「ハ、……」）めん、ティア）」

怒りを爆発させるティアナに、スバルは只々平謝りをするしかなかつた。

「（まつたく……もづくぐそつちに合流するからそれまで待つてなれこー）」

「（でも、ティア敵が出てきたときせ）」

「（い・い・わ・ね！）」

念を押すようにスバルに言い聞かせた後、ティアナは一方的に念通を切つてしまつた。

そして、念を押されたスバルはと黙つと。

「頭がくらくらする

ティアナの大声によつてノックアウト寸前まで追い込まれているのだった。

* * * *

～Side レオ～

万が一のことを考えて、リニアレールの近く。山岳の頂に降りて観測を続けるのだったが……。

「嫌でも田に入るな……」

視界から外しているつもりなのだが、青髪の少女がリニアレールの破壊を行っている光景がちらほら田に飛び込んでくる。

ガジェットと少女のどちらかが襲撃者かと判断するならば、間違えなく後者と答えるだろう。

傍から見ればどう見ても少女が破壊活動を行っているとしか思えない。

本人にそのつもりはないとしてもだ。

「これはハ神嬢も頭を抱えている頃じゃねえか？」

「やうだな」

オウルの意見に賛同する。

まさか、ハ神もこれ程の爆弾を抱えているとは思わなかつただろう。

幼き騎士の事と言い、青髪の少女の事と言つて、つべづべ読みの甘いやつだ、あいつは。

「はやて様もお若いですか？」

「それだけでは口実にならないぞ」

機動課の一郎隊長の座。

そこにどれだけの重みがあるか知っているだろ？

些か疑問である。

回収物の中には下手をすれば、複数の次元世界を崩壊させかねない代物もあるのだ。

その危険物の回収といつ管理局内でも、重要な役割を任される機動課の隊員に選ばれることは、ある意味名誉である。

部隊長ともなれば尚のことだろ？

良く言えばエリート中のエリート、悪く言えば歳不相応。幾ら実力主義の管理局だとしても若干19歳で部隊長を任されるのは……異例かもしれない。

似たようなケースを知っているだけに何とも言えないのだが……。

何はともあれ、部隊長になることをハ神が望み、周りが認め、局が任せてくれるのだからこれ以上言うことはあるまい。

不測の事態に対処し損ねようと、彼女の実力不足なのであるのだから……。

〔曰那は相変わらず手厳しい〕

「そんなことはないぞ。俺はただ状況を鑑みた上で、冷静な判断を下しているだけだ」

〔それが手厳しいんだつづけ〕

「…………」

「うむ……。

どうしたことなのだらうか?

オウルがちやうけんことはあつても、いつ眞面目に忠誠を守り、
とは数少ない。

俺に助言を『えてくれるのまつもならマイのままである。

それなのに今日は……。

不真面目バイスの戯言を一度聞き逃し、あまりセカンドヒルを受け
てしまふ有様。

「まあ、口ではあれこれ言つても、こぞ行動するとなれば自分の言
葉を反故にする様な行動をとるわけだが……」

「それが主なりの優しさですから」

さういは、幻聴まで聞いえてきた。

いかんな、疲れているのかもしれん。
早めに切り上げて休むことにしよう。

最近の不摶生な生活を呪いながら再度目標に意識を集中する。

「ここでは射角が悪いな……」

断続的に暗陰になつてリニアレールを常時補足できない。
普段ならこのようなミスはないはずなのだが……。

やはり、調子が悪い。

「オウル、次の狙撃ポイントは?」

〔検索済みだぜ！ 感謝しろよ〕

「ああ、助かる」

〔一？〕

いつの間にかポイントを探し終えていたオウル。

場所は……頂の小さな谷間か。

開けた場所ではあるが、切り立った岩肌が自然の城砦を思わせる。上空よりは視野が狭いそうだが、隠密性に優れた場所のようだ。

真面目にせればできるじやないか、オウル。
少し見直したぞ。

〔旦那が遂に感謝の言葉を…〕

「何を言つているんだ、行くぞ」

〔感動するのは分かりますが、いまは先んじてやることがあるでしょう？〕

何やら一人（？）感嘆の声を上げるオウルに釘をさす。

〔旦那が人に、特に俺に対してお礼を言つなんてめったなことではないだろ！！〕

〔確かにその通りではありますガ……〕

「だるー！ だるー！」

「…………」

盛り上がるオウルを他所に俺は無言で地面を勢いよく蹴った。

全く、失礼な奴である。

少し褒めたら調子に乗りおつし……。

（まあ、一割増しのメンテナンスで我慢してやるか）

俺は誰にも分からぬぐらうつすうらと笑みを浮かべ、オウルの処刑を再度決心するのだった。

第三話 管理局の幽靈（中編3）（後書き）

レオ「突入するぞ、アルク」

アルク「ちょっと待つてください、まだ牛乳を飲み終わっていません
ん……」

レオ「3……2……1……突入！」

アルク「つて、人の話を聞かずに突入しないでください……！」

レオ「作者、一週間の放置といつ暴挙。覚悟は
」

アルク「どうしたんですか！？」

レオ「一足遅かつたようだ」

アルク「これは……もしかして、レオが！？」

レオ「お前、人の話を聞いていたか？ この様子だと、死後一時間
余りか」

アルク「容疑者から話をお伺いすることはできませんでしたが……
だとするといつも通りですね」

レオ「いや、今回は俺達が捜査に当たるわ」

アルク「へっ！？ どういう風の吹き回しですか？」

レオ「なに、作者がそのうち蘇生するからそれから話を聞けばいい。なに、これ以上に楽な仕事はなかろう」

アルク「…………」

レオ「とはいって、捜査はきちんとやる。犯人を割り出すのか……いつの蘇生と同じくが早いか競うのも、また一興であろう」

アルク「……はあ、良いですよ。お供いたしますよ、レオ」

レオ「なつとらん……！」

アルク「今度はなんですか……」

レオ「捜査の間はメインン卿とお呼びなさい」

アルク「は、はあ……分かりましたメインン卿（また、始まったよ。年に一度ぐらいある悪ふざけが……）」

レオ「宜しい、アルソン君」

アルク「なんですか、その取つてつけたようなネーミングセンスはどう!?」

レオ「アルソン君の言つ通りだが、何か不満かね？」

アルク「…………もつ、いいです。ひとつと捜査を始めましょう」

レオ「つむ」

前書きと後書きのショートストーリー。

迷探偵レオ・マイソンとゆかいな仲間たち。

次回に続く(?)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4467w/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~灰より生まれし王~

2011年10月31日02時30分発行